

音楽の世界

目次

論壇	作曲家戦後第 1 世代の交代	中嶋 恒雄	2
特集	動き、動作、所作と音楽		
	遣唐使がもたらした王朝の舞踊	国枝 たか子	6
	体操と音楽について	加藤 由美子	9
	日本とアラブの舞踊と文化	花崎 さみ八	14
	音楽と舞踊	高橋 通	19
特別寄稿	花輪一郎さん追悼	助川 敏弥	21
長期連載			
	音・雑記一ひなの里通信一 (46)	狭間 壮	22
	名曲喫茶の片隅から (27)	宮本 英世	24
	音盤奇譚 (32)	板倉 重雄	26
コンサート・リポート	第 4 回フランス歌曲研究コンサート		28
	エレクトーン・オーケストラとは?	西山 淑子	30
コンサート評	深沢亮子ピアノリサイタル	浅岡 弘和	31
	東日本大震災から 1 年を経て いま本会では	編集部	32
短期連載			
	福島日記(8)	小西 徹郎	34
	明日の歌を (第六回-3) 今井 重幸 その 3	橘川 琢	36
	現代音楽見聞記(12)	西 耕一	41
コンサート・プログラム			
	動き、舞踊、所作と音楽		42
	日本音楽舞踊会議 楽譜出版部からのお知らせ		51
	CMDJ 会と会員の情報		52
			1

作曲 中嶋 恒雄

このところ毎月のように大戦終了後すぐに若き旗手として活躍した作曲家たちの訃報が、次々に知らされる。林光、三木稔、少し年長だが別宮貞雄の諸氏たち。彼らが日本の作曲界に残した遺産は大きい。日本が明治以来経済的、文化的に営々と欧米に追いつくことに専念し、ようやく追いついたかと思われたのもつかの間、

「Japan as number one」と云われると同時に高度成長期は終わり、失われた20年からさらに確実に衰退に向かいつつある現在、日本の作曲界も衰退に向かっているように思える。これらの世代が果たした役割は、概略的に云うならば、欧米の音楽文化に追いつくということであった。しかし彼らのうちの何人かが音楽の歴史の上に名を止め、彼らの役割を終えるとともに、日本の国家と同じように作曲界もまた、方向を見失ってしまった。人間が生きるということは、人間もまた動物である以上、動物たちと同じように厳しい。人間は万物の霊長であると私たちは考えているが、果たしてそうか。動物たちは仲間同士で喧嘩はするが殺し合うことはないし、他の動物を殺して食べるが、満腹すればそれ以上には殺さない。動物が恨みや嫉妬心や興味だけのために、仲間殺しをするということは決してない。前途を悲観して自殺することもない。人間が万物の霊長である所以は、大脳前頭葉に宿ると今日の脳科学が述べている。この大脳前頭葉の発達こそが、人間を人間たらしめているものであり、悪く働けば恨みや嫉妬心、その他もろもろのよこしまな欲望を生み出し、正しく働けば思いやりや、創造を生むのである。毎日の暗いニュースや果てしなき利己的な競争は、人間が動物以下に振る舞っていることを示さないだろうか。

戦後10年ほどして出された有益な音楽書に、ポーランドに生まれ、フランスで活躍した作曲家、指揮者のルネ・レイボウィッツの書いた「音楽の進化～バッハからシェーンベルクまで」(邦訳現代音楽への道)がある。この書のショパンの項目に興味深い1節がある。作曲の専門家とアマチュアという分類である。彼の定義はこうである。すなわちプロフェッショナルな専門家は、音楽の新しい想念を表現できるような新しい音楽組織の創造を目指すのに対して、アマチュアは、既成の音楽組織、音楽の枠組みの中で旋律やリズムなどの部分的要素の発明を目指すと云うのである。ここではもちろん、金銭的、職業的な意味は含まない。この区分は、文学で云う純文学と大衆文学の区分以上に厳しい区分である。この基準によればショパンは、形式や和声上の新しい発明はないが、細部には魅力や創意が溢れているから、アマチュア以外の何者でもない。しかしアマチュアの中では、彼は天才だというのである。ところで近年の情報科学は、新しい音楽組織の創造はもはや生まれないと述べる。この理論によれば音楽の意味は、ある音楽的な出来事が次に来る音楽的な出来事を、

聞き手に予想させるところに生まれるという。そこで聞き手の予想が全て当たるならば、情報量は低く意味のない、つまらないものになるし、予想が全て当たらないならば、情報量は高いがその意味を理解することが出来ない。それでも何とか理解しようとするとしても、人間のもつ情報許容量には自ずと限度があり、予想が全て外れるならば、かえって人はその音楽がでたらめだと感じて、聴くことを諦め、無視してしまう。1992年に死去したジョン・ケージのもたらした偶然性の音楽、不確定性の音楽は、このもっとも情報量の高い音楽であった。ここでは次に来るべき音楽的出来事を予想するとしても、その予想は全て裏切られる。しかしそれでも人がこの音楽から注意を逸らしたり、聴く事を諦めたりしないで聴き続けるとするならばどうなるか。例えば私たちが路傍の小さな花々や、青い空にぽっかりと浮かぶ雲を「いいなあ」と思ってみる時、私たちは次に起こるべき事を予想するであろうか。それらの花や雲がどのようなであって、どこから来たのかなどと考えるであろうか。そのとき私たちは、ただ見るだけ、ただ眺めているだけで、それがどのようなのかとか、それがどうなっていくかなど、いっさい考えないでただ見とれている筈だ。道元の正法眼蔵の一節に次の言葉がある。「自己をはこびて方法を修証するを迷いとす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり」。この言葉の真の意味を私は未だとても理解できないが、それでも道元が何を云おうとしたかの方向だけは少し分かる。私たちはふつう、自分が花を見ている、自分が雲を見ていると思って生きている。けれどもその自分というのは何なのか。ここでは自分と花、自分と雲がこちらとあちらに分かれ、対立している。しかし私たち音楽家はみな、かつて一度はほんとうに音楽はいいなあと感動して、たとえ生活は成り立ちそうもないと分かっただけでも、止むに止まれずにこの道に入った筈だ。そのときの感動を思い出してみたい。私たちの心は音楽で満たされ、或は音楽の流れに乗って、自然に涙が溢れはしなかったか。そのとき演奏がどうだとか、旋律の展開がどうだとかは一切考えずに、私と音楽、音楽と私は一体であり、聴いているという自分自身のことなどは、全く忘れていた筈だ。ここで道元の云いたい事は、演奏がどうだとか、音楽がどのように展開するかなどの思いはすべて自分の思い、解釈であって、音楽そのものではないと云うことなのだ。さらに云えば、音楽を聴くこの自分というものそれ自体が、観念の枠であって実体ではないというのだ。だから道元は、見ようとしなくて見よ、聴こうとしなくて聴け、考えようとしなくて考えろと云っているのである。私たちは音楽を聴くとき、ミスはないか、フレーズがレガートに歌われているか、構成は明確かなどなど、つねに批判的に聴いている。これでは感動などということは決して生まれぬ。私たちは音楽を専門にするようになってからは、自分の受けた音楽教育や経験によって、つねに自分よりも優れた演奏や作品を聴けば、劣等感や絶望感を感じ、自分よりも劣った演奏や作品を聴けば、優越感や軽蔑を感じ

じながら音楽を聴いている。しかし道元が云っている事は、それらは全て自分という考え方の枠による解釈であり、夢であり、ほんとうの実体では決してないということなのだ。ジョン・ケージは自分の音楽は禅の思想がなかったら生まれなかったと述べたそうだが、私たちが彼の音楽を聴くとき、この道元の示唆のように聴かないならば、彼の不確定性の音楽からは何の意味も見出せない。ジョン・ケージはシェーンベルクに習っていたときに「君は和声感覚を身に着けなければいけない」と諭されたというが、ケージはそこから彼自身の道を見つけ、私たちが音楽を聴くその聴き方それ自体について、警鐘を鳴らす音楽を作ったのであろう。

さて、音楽が情報科学の述べるように新しい音楽組織の創造を生まないとするならば、私たちはそれを受け入れよう。それならばレイボウィッツの云うように、全ての音楽家がアマチュアということだ。優秀な作曲家で指揮者としても活躍したピエール・ブーレーズは、ケージは作曲のアマチュアでプロフェショナリズムに届いていないと云ったそうだ。しかし作曲家のモートン・フェルドマンは、「ブーレーズはケージもアイヴズも私もアマチュアだと批判する。ところがバルトークの語法をいまだに遵守しているブダペストの作曲家を、彼はプロだと称えている」と云ったという。要するにみんな自分自分の立場で、絶対的な基準もなく物を言っているだけだ。ケージたちがアマチュアならば、ブーレーズは腕の良い職人に過ぎまい。ケージの生活はかなり大変だったようだ。彼は自分で発見し、創造するのが芸術教育だと考えていたから、人を教えることで生活の足しにする事はなかった。また彼の音楽は職人芸を必要としなかったから、職人芸を売ることは出来ず、生計を立てるのは余計に難しかっただろう。しかしそれでも彼は、生を全うした。ところで私は今、本年11月に多摩美術大学で開催される予定の佐藤慶次郎回顧展のために、彼の残した膨大な資料に埋もれて、彼の生涯を展望しようと格闘している。彼のことは多くの人知らないであろう。彼は本会代表の助川敏弥氏が1位のときの1954年の毎日コンクールで2位に入賞し、翌1955年に実験工房演奏会で武満徹、湯浅譲二らとともにピアノ曲と器楽曲を発表した。そして1961年に「ピアノのためのカリグラフィ」という曲で米国の批評家ヒューエル・タークイをして「これはとてつもない曲だ。私は他の曲でこれと似ている曲を全く知らない」と言わしめ、その年ウィーンで開催されたIMC世界音楽祭に入選した。しかし以後は、3曲の弦楽器のためのカリグラフィを発表し、1970年の大阪万博で音響システム全体の制作をただだけで作曲することを中止した。そして今度は全く新しい概念を持つエレクトリック・オブジェを作って、音楽の世界から美術の世界へと去って行った。思うに彼は、カリグラフィでレイボウィッツの云うプロの仕事をした後は、アマチュアとして音楽の仕事をし続ける事に興味を持てなかったのだと思う。そこで彼は新しい美術の分野で、岐阜県美術館やセビリア万国博覧会などのためにプロの仕事をした。しか

しそこでも彼は、自分の語法を確立した後は家に籠ったまま、仏教の研究三昧に明け暮れて3年前に世を去った。私は彼に18歳から半世紀以上も親しく接して、多くの教えを得てきた。禅の分野で見性という事実がある。これは先に述べた自分という自我の枠が無くなって、対象と一体になる体験を言うのであるが、佐藤はジョン・ケージの演奏を聴いているときに、まさにこの体験をした。以後彼は、ジョン・ケージの音楽を聴いて得た体験が禅で得る見性体験と同じものかどうかを確かめるために、禅の師匠のもとで座禅修行をし、研究を重ねた。結果彼は見性から16年後に、禅で云う大悟徹底という体験的な段階にまで到達した。私が彼から学んだ事は、作曲でも何でも、自分の仕事を一生懸命にやれ。何事にも集中して余計な事は考えずに取り組めば、そこでは自ずから座禅と同じような心の澄みきった静慮(じょうりょ)が生まれて、自我が消えて行く。そうすれば君は対象と一体(一如と言う)になり、対象は君となり、その対象は君の修行に応じて無限に深められると云うのである。もしこの境地にまで集中を進めながら私たちが作曲し、演奏をするならば、それは自ずと深まりに達した他の人には通じて行くことだろう。まるでモーツァルトが弾いているかのような演奏や、まるで自然が作り出したかのような作品、という感覚である。新しい音楽組織の創造や、新しい演奏解釈というものは科学の進歩と同じで、道元の云う迷いである。もちろんこれも真実である。しかし新しい音楽組織の創造や、新しい演奏解釈は、珍しく、新奇ではあるとしても、それが直接に人を感動させることはない。しかし私たちが求めているものは、感動であり、自分らしくありたい、自分自身でありたいという心の納得だ。禅は迷いつつ悟り、悟りつつ迷うとも云う。佐藤も純粋な生命力の表現という彼の音楽や美術のあり様のために、歴大な数学的、物理的な考察という迷いを重ねた。しかし彼が戦った敵は外にあったのではなく、つねに内なる彼自身の中にあっただけであろうことは明らかである。彼のオブジェはまったく静かである。裏に電磁気の仕掛けがひそんでいる事など、見る者にはまったく気を付かせない。そして私たちに静寂と、この世の存在への無限の不思議さの中へと誘ってくれる。私たち音楽をする者は誰でも、それぞれの置かれた条件のままに自分の小さな我を無くし、無心に音楽をする求道の道にいると思う。ここではレイボウツツの云う意味においても、平たい意味においてもプロもアマもなく、等しくみな永遠の音楽求道者である。そしてこのように音楽をするならば、私たちの大脳前頭葉は自ずと正しく働いている。佐藤の禅の師匠は「仏道は修行すればするほど身につく。身につけば身につくほどまだだめだと思う。そうしてまた修行する。この繰り返しだよ」と彼に教えたという。私たちの音楽の道もまた、まさしくこれと同じなのだとしみじみ思う此の頃である。

(なかじま・つねお 本会作曲会員)

遣唐使がもたらした王朝の舞踊

舞踊 国枝 たか子

1、シルクロードから遣唐使の話題へ ～井真成という留学生に注目～

ペルシャ、ウイグル、西安を結ぶシルクロードには、それぞれの音楽や舞踊が伝わっていて、ユーラシア大陸の極東に位置する日本まで、はるばる旅をしてきた楽器やダンスが現存している。私が主催して10年になる「世界舞踊祭2012」でこれを紹介しようと東京芸術大学で音楽博士号を授与された研究者に、ウイグル舞踊の上演と解説をお願いしたところ、上演1カ月前に研究上の理由でウイグルに帰国されてしまい、計画はとん挫してしまった。急に穴のあいたプログラムはチュニジア大使館とロシア民族舞踊の美しいダンサーによって補てんされ事なきを得たが、関係者の落胆は大きなものだった。ボランティア団体による運営の弱点を思い知らされた結果だった。年に1～2日、2～4公演のフェスティバルで観客の皆さんから満席で毎回ご好評をいただいても、なかなかスタッフにとっては苦労が絶えない難関である。

シルクロードの中国側入口である西安は実に興味深い。十年ほど前に同僚の考古学者による情報で、井真成という遣唐使留学生（日本人）の墓誌が西北大学博物館に寄贈されたことを知った。734年に36才で急死し、その墓が市東部の「さんすいの原」から出土したというのである。墓誌には唐の玄宗皇帝が「尚衣奉御」の官職を追贈し「屍（しかばね）は異国に埋葬するが、魂は故郷に帰るだろう」と記されていた。尚衣奉御は日本でいえば位階の正五位下にあたる。これにより井真成は中国で科挙の試験に合格し、正式に唐の宮廷に奉職していたことが判明した。わずか36才でこの官位を持っていたとすれば「春日なる三笠の山に出でし月かも」で有名な安部仲麻呂と同様に優秀な役人だったといえよう。

井真成は717年第8次遣唐使であった。日本側の記録によれば、安部仲麻呂、吉備真備、僧玄坊といった留学生と共に、4つの船に乗って中国へ派遣された。このように607年の小野妹子の遣隋使以降、中国から帰国した留学生たちの働きによって日本は立国してきたのである。

2、中国からきた日本宮廷の舞踊と音楽

舞踊や音楽もガバナンス（日本の統治）に大きな影響を及ぼしたと推測される。612年推古天皇の御世に中国からもたらされた雅楽、舞楽が宮廷で始まった。年間を通して宮廷の朝儀典礼や晩餐において重要な役割を果たすようになった。のちに朝鮮からの音楽、舞踊も採用されて左方は唐楽、右方は高麗楽が制度化された。昨

年（2011年）2月に国立劇場で上演された唐楽の大曲「蘇合香（そこう）」は、唐でこの曲を習い覚えた和邇部嶋継（わにべのしまつぐ）が日本に伝えたものだが、

帰国途中で彼が一部を忘失したため、序破急のうち「序二の帖」が欠けていたという。現行の上演でも二の帖は上演されない。6人の舞人が蘇合香という草を形どった被り物をつけて華麗に舞うことで知られている。言い伝えでは古代インドの王がこの草を薬にしたところ、たちまち治癒したため喜んでこの曲を作らせ、またこの草を甲にして舞ったという。著名な大曲である。

伊勢物語のモデルとされている在原業平は、825年（天長2年）に生まれた。稀有な歌人であり美貌の男性として有名であるが、もちろん舞や管弦を貴族の教養として身につけていた。母は帝の娘である伊都内親王である。

日記文学、女流文学では「かげろう日記」の中で970年（天禄元年）3月15日に内裏で弓射の試合があり、

舞楽「蘇合香」上演のポスター（国立劇場）

道綱の母の記録では当時16歳の息子が味方の劣勢を盛り返して引き分けに持込み、人々から大変な賞讃を受けたと書かれている。さらに引分けのため、左方右方の両チームが舞を舞うプログラムに則り、舞においても息子道綱は素晴らしい出来栄であったので、帝から誉められて御衣を賜り、母は「あやしきまでにうれし」と書き残している。

3、王朝貴族のスポーツと舞踊

当時は弓や馬などのスポーツが貴族社会で盛んに実践されていたが、舞楽や雅楽も儀式の中ではセットになっていたため、子弟はしっかりとトレーニングされていた。後に盛んになる「けまり（蹴鞠）」は、ボールの形状や材質が日本化されざるを得なかったため（日本では鹿の皮を用いた）、少し時代がずれてポピュラーになった。優雅なイメージが一般的だが、実のところはかなり激しい、汗臭い、運動量の多いスポーツだった。

例えば後鳥羽上皇は蹴鞠が大好きであった。彼は身体が大きく武術にも強く、1208年（承元2年）水無瀬離宮の鞠会で大活躍をし、彼のチームは2000回連続パスとい



切手になった貴族のスポーツ乗馬

う記録をあげたと伝えられている。飛鳥井雅経は貴族の一人であるが、後に「蹴鞠」と「和歌」の道の家元となり子孫はこれを継承した。家伝書は日本製フットボールともいえる蹴鞠の技術やコンセプトを現代人にも伝えている。貴重な古文書となっている。このように日本古代型サッカープレイヤーとして優秀だった後鳥羽上皇は和歌や管弦にも優れていたが、衆知のように鎌倉幕府の時代に隠岐の島へ流罪となって果てられた。

さて舞楽雅楽のその後であるが、1392年の応仁の乱で楽人は京都から離散してしまい、中央政府の儀式の権威もなくなった。都では別の新しい芸能が立ちあがり、やがてそれが武士の時代の主流となり、あるいは町人の時代の主流を形成す

る。ご存じのように能楽の時代、歌舞伎の時代が到来するわけである。散りぢりになった楽人たちは落ち延びて山間の部落や神社に入り、あるいは裏日本の山あい、東北地方へ、四国や九州の険しい僻地で生き残った者たちが芸能を伝えた。消えたものが大半であるが、民俗芸能として現在も舞や音楽が残されている。

4、舞踊遺産としての、もうひとつの価値

舞楽や雅楽は左方が唐楽であり、右方が高麗楽であるから、中国と朝鮮の伝統も伝えている。本国では激しい権力闘争による政変が起きており、現在のカンボジアに例をとるまでもなく前政府、前王朝の文化が根こそぎ壊滅させられて楽人の命も奪われてきたため、今となっては、日本にしか残っていないものも存在している。

中国・朝鮮の両国で壊滅した歴史的王朝の舞踊や音楽が、日本にのみ残されている。極東のもっとも辺鄙な島国であった日本列島の、厳しい山岳地帯の村々には、そのような稀少な舞踊文化が散りぢりになって、いまも眠っているのである。そして日本の舞楽・雅楽そのものもまた、両国の滅びた王朝の忘れ形見かも知れない。

（くにえだ・たかこ 舞踊家／世界舞踊祭2012会長）

体操と音楽について

作曲・ピアニスト 加藤 由美子

私は、平成10年よりNHK テレビ体操・ラジオ体操のピアニストとして番組に出演しておりますが、紙面をお借りして体操と音楽について書かせていただく機会を得られて、大変感謝しております。

<ラジオ体操とテレビ体操の歴史>

ラジオ体操は、昭和3年に当時の逓信省（ていしんしょう）簡易保険局が「国民体操」として制定し、同年11月よりNHKがラジオ放送を始めました。アメリカの保険会社が、満期まで健康であるようにと体操を作った事にヒントを得、簡易保険を売り出す際にセットで作られた体操です。何て、長期的な夢のある考え方でしょうか。アメリカの体操は続かなかったようですが、コツコツと続ける事が気性に合う日本人には広く普及し、戦争中の一時期を除き、今日まで続けております。テレビ体操は昭和32年の10月より放送開始。こちらもニュースと大相撲に続く長寿番組になっております。又、動きのゆるやかな「みんなの体操」も、平成11年より放送を開始しました。

<365日放送しています>

テレビ体操（6：25～6：35Eテレ、14：55～15：00総合テレビ）、ラジオ体操（6：30～6：40ラジオ第1、8：40～8：50ラジオ第2）、みんなの体操（9：55～10：00総合テレビ）と、番組のタイトルは別々ですが、体操指導者3人、ピアノ伴奏者3人、アシスタント6人の出演者、スタッフも同じメンバーで3つの番組を作っています。各曜日ごと、午前と午後の内容を変え、2か月は再放送で流しますが、収録する本数はかなりの数になります。365日休みなく放送されておりますので、日常の生活に組みこまれ、時計代わりに聴いている方も多いようです。以前、朝のラジオ体操の放送時間を遅らせたところ、苦情が相次ぎ、元の時間に戻したことがあったそうです。しかし多くの方は、夏休み43日間の全国各地からの生放送の印象が強く、1年中放送している事をご存知無いのでは？実は私もこの仕事を始めるまで、知りませんでした。夏休みの風物詩のひとつでしかなかった気がします。

<なぜ、体操のピアニストになったか>

私は、ピアノは3歳より、作曲は11才より習い始めましたが、父も母も音楽には関係が無く、特に母は日本体育大学出身でした。北海道苫小牧でスピードスケートの企業選手を数年してから上京し、大学に入学した為、現役の短いスポーツ選手の苦しみが身にしみていたようです。私も妹もスポーツが大好きでしたが、家訓は「スポーツの道だけは進まない事。一生現役を続けられる仕事に就く事。しかし成長期の間は、スポーツ中心にみっちり体力をつける事。」かなりのスパルタでしたが、そのお陰で体力には自信があります。

そのような育ちですので、音楽家の中では浮いた存在でしたが、体操と音楽のつながりは自然と身につけていったようです。母の後輩達がテレビ体操・ラジオ体操の指導者だったこともあり、ピアノ伴奏者のオーディションを受けられたのですが、何十年もピアノ伴奏者を続けられる方が多い中、ラッキーだったと思います。私はラジオ体操84年もの歴史の中で、7代目のピアニストです。今の放送は、5代目の幅しげみさん、6代目の名川太郎さんと3人で担当していますので、キャリアは私が一番浅く、学ぶ事が多いです。

＜即興演奏が必要な理由＞

よく、「音楽に合わせて体操をしている」と言われますが、実際には体操を見ながら演奏しています。まず、体の動きに合わせる事が重要です。同じ体操をしても、指導者3人はそれぞれ微妙に間の取り方が違いますし、ピアノの3人も、タッチや音色、強さ等、個性があり同じ演奏にはなりません。お互いの息を合わせる事が大切になります。ラジオ体操第1は3分10秒、第2は3分5秒を目安として弾いておりますが、それ以外の体操は、全て即興演奏になります。放送のエンドは秒単位で決まっており、タイムキーパーがいないので、時計やストップウォッチを見ながらピアノが調節する場面が多くなります。特に各地からの生放送は、何が起こるか分かりませんので、体操指導者とのアイコンタクトで、急に体操内容が変わったりします。その土地の紹介コメントが冒頭にあり、毎日長さが違うので、即興演奏でなければ対応できません。ですから、現在のピアニスト3人は、皆作曲科を卒業しております。

音楽現代

2012年3月号 定価840円

♪特集＝モーツァルトのコンチェルト～その魅力と魔力
エッセイ＝「モーツァルトのピアノ・コンチェルト」

〈室井摩耶子〉

新連載＝「回想のモーツァルト～モーツァルトとともに
70年」〈海老澤敏〉

♪特別企画＝作曲界の巨星、相次いで墜つ

～別宮貞雄・三木稔・林光

♪インタビュー

豊田喜代美 吉田恵 水口聡

アドリアン・ユストウス 他

♪カラー口絵

・日本オペラ協会／池辺晋一郎「高野聖」

・HIROSHIMA HAPPY NEW EAR OPERA／細川俊夫「班女」

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159

＜恐るべしラジオ体操＞

この世界に入った時、まず最初に言われた事は、「今まで習った音楽の概念を捨てなさい」でした。ラジオ体操を弾く時、通常の4拍子が持つ「強・弱・中強・弱」は、あてはまりません。3拍子も同様です。体操の力を入れる拍が、どの拍であれ強拍になる。同じように長さも均等ではありません。たとえば胸をひらくような時間のかかる動作は、よく動きを見て呼吸を合わせる。変な所がのびたり強くなったりするのですから、音楽的にはすっきりしなくても、要は体操をしやすいのがベストです。左手も普通は伴奏になるから小さく弾くような曲でも、拍がわからないと体操をしにくいので、割と強く弾きます。右手のメロディーがかくれてしまっても、音楽的バランスが悪くても、体操の呼吸を合わせやすい方を選びます。体操指導者の号令も、気持ちが表れますので、元気の良さ、長さ、強さ等で次の体操が求めるものを察せられます。普通の放送では先に述べた目安の秒数ですが、老人ホームなどを訪問して体操をするような場合は、跳躍運動や胸そらし等の負荷のかかる運動は少し早めに弾くような心配りも必要かと思えます。テレビもラジオも、色々な目的を持って見られる幅広い年齢の方々を対象としておりますので、曜日によって筋力強化、シェイプアップ、ストレッチ、ほぐしの体操と目的を分けています。又、ラジオ体操をくわしく解説する日も作っています。ですから音楽も目的に合わせてるように心がけております。短調の曲は、あまり好まれません。元気が出る軽快なメロディーや、いやし系のゆったりしたものなど場合に依じて使い分け、体操が変わる毎に調も変えるようにしています。昔のように学校の授業でラジオ体操をする機会が少なくなり、夏休みも騒音問題や生活リズムの変化でラジオ体操をする子供会や自治会が減ってきております。共働きの家庭が増え、夜型の生活の為に早起するのが困難なようで、ラジオ体操ファンはご年配の方中心になっております。しかし、時々コンサートでいたずらにラジオ体操を弾いてみますと、条件反射のように会場のあちらこちらで手を上にのぼす方がいて、大変嬉しくなります。日本人の体に、ラジオ体操の音楽が染みついている、自然と動きたくなるのでしょうか。音楽の力はすごいと思えます。

＜生放送のアクシデント＞

夏休み中の43日間と、祝祭日を中心に年間約10本の特別巡回ラジオ体操の合計53本近くは、全国各地からの生放送になります。普段は渋谷のNHKスタジオでの収録ですが、この各地へ出たの生放送は、色々な事が体験出来ます。ざっと本番までの流れを説明します。北海道から沖縄までの晴天と雨天の会場が設けられる所なら、どこでも放送を出せるのですが、多くは体育館が隣接する公共のグラウンドや、学校の校庭になります。時々、海水浴場や市場、漁港などもあります。放送前日に現場入りし、午後にリハーサルをし、スタッフ側やピアノ等の備品の確認をします。各地方のNHKスタッフは、普段からラジオ体操にたずさわっていない

為、タイミングは私達が伝える事になります。夏休み中は、体操指導者とピアノの担当者のみが旅をするわけで、3人ずつおりますから3組作れ、前の組が帰宅する日に次の組が出発し、常時どこかの組が各地方の現場にいる事になります。当日は、



舞台上よりピアノ演奏中の筆者

スタッフが4時に現場入りして晴天か雨天の会場判断をし、6時から参加者とのリハーサル、6時30分からの生放送となります。ピアノは雨天と晴天会場に各1台ずつ用意し、外に置いたピアノは、ひと晩そのまま保管ということも珍しくありません。調律師は、夏の炎天下の午後と早朝の暗い中を懐中電灯で、2回

調律をして下さいます。大変なご苦労だと思います。又、時々ものすごく古いピアノや、珍しいメーカーのものに出会えますが、それも調律師泣かせのものになります。参加者は平均2000人くらいでしょうか。私はデビューした年の夏休み前まで、スタジオだけの収録でしたから、どれだけ多くの方が聞いて下さっているのか実感がありませんでした。初めて外へ出て、何千人もの人を見た時、大変感激しました。年に一度「1000万人ラジオ体操・みんなの体操会」というのがあります。会場は毎回変わり、今年は北海道からになり、その日は15分番組で、テレビとラジオ同時放送です。1000万というのは、ラジオ体操を毎朝聞いている人数だそうです。今は国際放送で外国にも流れており、ブラジルやハワイにも愛好者が大勢います。全国から観光バスなどで1万人以上集まり、初めて担当した時は大変緊張したものです。さて、本番のアクシデントですが、天災が多いです。突然の雨で、ピアノにテントをかけるのがギリギリで難をのがれたり、山の中の天然のエコーで弾いていると反響音でわけがわからなかったり、海岸の砂ぼこりで目が痛い中での演奏等、何が起きても弾き続けないと放送事故になりますから、大変です。日本は東西に離れていますので、朝の6時は北海道では既に陽が高く、沖縄では真っ暗です。生放送中に陽が昇る事も多く、朝礼台の指導者が太陽の昇る方向に当たらないように注意し、ピアノの位置を指定しております。最近は地震が多いので、もし本番中に地震が起きたらどうするかという事を、毎回確認しております。又、選挙の時等も、NHKは公共放送ですので放送に宣伝カーの声などが入らないように、神経をとがらせております。個々のアクシデントを述べると、それだけで1冊本が書けそうですが、お天気との勝負のような野外の生放送でピアノを弾くという貴重な体験が出来る事を、幸せだと日々感じております。参加なさった方は、皆さんさすが

がしいお顔をして帰られます。元気の良い明るいピアノの音で、一日がスタート出来るようにと思いながら弾いております。

＜心と体の健康を＞

数年前よりラジオ体操第1と第2の間の「首の体操」の音楽に童謡や唱歌、良く知られたクラシックなどをアレンジして弾くようにしています。季節に合ったもので、4拍子の曲を中心に選んでいます。反響が大きく、よくお手紙をいただくようになりました。先に述べましたように、ご年配のリスナーが多いので、昔の記憶が呼び起こされるようです。「亡き父が好んで歌っていた曲です。」「戦争中に別れた弟と、最後に一緒に歌いました。」という様な思い出がつつられています。題名を忘れたが、歌詞はこんなでしたと葉書に書かれた歌詞が、現在のものとは違い、戦前はこうだったのかと教えられる事もしばしばあります。よく老人ホームでの体操の伴奏に行く事がありますが、動きはなかなか覚えられず、体も言う事をきかないという方でも、「せっかくですから、童謡を一曲」とピアノを弾くと、スラスラと歌詞を大声で歌い、生き生きとした表情になる事があります。脳の活性化に音楽が大変良いと実感出来ます。全国を生放送でまわる際にも、その土地にちなんだ民謡や唱歌を体操や冒頭の会場紹介コメントのBGMとして弾いておりますが、これも好評を得ております。私の母は、毎日ラジオ体操をしており、生放送が終わるとすぐにメールで曲名を当ててくれます。個人的ではありますが、母のボケ防止にも役立っております。「いつでも、どこでも、だれでも」がラジオ体操のキャッチフレーズになっておりますが、不況に強い体操である事も確かなようです。ジムになど行かなくても、自宅で、体ひとつで出来ますから。さて、今年の東日本大震災の後、避難所でラジオ体操をという声を多くいただき、夏前から少しずつうかがうようになりました。狭い場所での生活が続くと、健康を害します。少しでもお役に立てればうれしいです。最近も、仮設住宅でのラジオ体操にうかがっております。主に体操指導者が現地へ出向いておりましたが、ようやく電子ピアノ等の用意も可能になり、ピアニストも一緒に行って、歌も入れられるようになりました。改めて命の大切さ、健康のありがたさを実感した震災でしたが、これからは音楽で心の健康も見直せたらと思います。これからも皆さんに、ピアノを通して「元気」を届けられたらと願います。

(かとう・ゆみこ NHK テレビ体操／ラジオ体操ピアニスト)

【著者プロフィール】加藤由美子

東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。平成10年よりNHK テレビ体操・ラジオ体操専属ピアニストとして出演中。(社)日本歌曲振興会理事、日本女性作曲家連盟東京支部長、(社)日本著作権協議会会員、(一般社団)日本音楽著作権協会会員



日本とアラブの舞踊と文化

saamiya／花崎 さみ八 舞踊家

1 はじめに

地唄舞とベリーダンス、二つの舞踊の特徴とそれらを生んだ文化について、自らの体験を踏まえて紹介させて頂きたいと思います。地唄舞は、型を大切にし型を忠実に守ることが重視されますが、一方のベリーダンスは、自由な型をその場で作り出す即興性が醍醐味であると言えます。このような二つの舞踊の対照は、それらの民族性、言語や宗教にも強く反映されています。そして、この対照的な両者を比較することで、お互いの特徴を客観的に認識することができ、また、その違いの根本にある共通項を探ることで、舞踊の本質についても考えることができるのではないかと思います。

2 舞踊について

I 地唄舞とは



地唄舞を踊る筆者

地唄舞は日本舞踊の中の一つで、最古の三味線音楽といわれる地唄の伴奏に合わせて舞われる舞です。江戸時代に上方で起こったことから上方舞とも言われ、その後、関東にも伝わりました。摺り足で足を運び、上下動のない能を基本とした動きで、一般的に歌舞伎舞踊などが、外に力を発散するような動的な振りの「踊り」であるのに対し、地唄舞は、内側に力を凝縮するような静的な振りの「舞い」であるといえます。したがって、常に体の軸を整え、滞りなく体の内側を動かし、足の裏に体重をしっかりと

りと落として、床から受ける力を最大限に利用していかなければなりません。また、どの瞬間においても体のバランスが保たれた状態でなければならないため、柔軟で伸びのある筋肉の使い方が要求されます。

また、地唄舞は、本来座敷で屏風と燭台の灯りだけで舞われ、衣装も着流しで、小道具も扇以外はあまり使用されません。このように、舞台や衣装、小道具などを簡潔にすることで、舞い手の動きを明確に映し出し、その抑えられた簡潔な動きによって、より深く印象的に内面を表現していきます。

代表的な演目としては、「雪」「黒髪」といった艶っぽく女心を唄ったものや、能からとられた「高砂」「葵の上」、歌舞伎の「道成寺」を取り入れた「鐘が岬」などがあります。

II ベリーダンスとは

ベリーダンスは、エジプト、あるいはトルコが起源と言われており、中東地域で発展してきました。1893年に、シカゴ万国博覧会で紹介されたことで大きく注目され、アメリカをはじめ多くの地域でブームを巻き起こしました。ベリーとは腹部という意味で、腰や腹部の動きが特徴的であることから西洋で使われるようになったといわれ、アラブでは、ラクス・シャルキ（東方の踊り）と呼ばれています。現在では多くの国で流行し、



ベリーダンスを踊る筆者

様々な文化と融合しながら新しいスタイルもつくられているベリーダンスですが、官能的な動きや衣装で踊られることが多いため、イスラーム圏では好ましくないものと蔑視されることも多く、イスラーム以前からあった伝統的な踊りであるという反面、社会的な位置づけは難しいものとなっています。

ベリーダンスでは、腰や胸の部分を独立させて円形や8の字を描いたり、細かく振動させたりする動きが特徴的で、速い激しい動きも多いため、かなりの筋力を必要とするように見られますが、実際には、筋力というよりも体の体幹を鍛えることが重要で、地唄舞同様、柔軟でバランスのよい筋肉の使い方が必要とされます。また、もともとは即興の踊りであるため、音楽によって自分の中に生じる感情の表現でもあり、音楽と踊りとその場の空気が相互に影響し合うことで作り上げられてゆく芸術です。

III ベリーダンスの音楽

ベリーダンスで使われる音楽は、エジプトやレバノンを始めとするアラブ音楽や、トルコ、ペルシア音楽などで、古典やポップス、器楽曲や歌謡曲など様々なものが使われます。また、それに合わせて踊りのスタイルも、エジプシャン、ターキッシュ、ジプシー、トライバルフュージョンなど様々です。

中東音楽は、西洋音階とは異なるマカーム（旋法）によって演奏されます。一音の間をいくつにも分け、微分音といわれるこの音によってマカームが特徴づけられ

ます。そして、それぞれの国や地域によって異なるマカームが使われ、独特の表現を生み出しています。また、アラブ音楽の特徴であるタクシーム（即興演奏）では、それぞれのマカームに則った演奏がされ、演奏者の腕の見せ所でもあります。ダンスと同様に、即興性が表現の上で重要な要素となっています。

この他、ベリーダンスでよく使われるダルブッカという太鼓では、低音、高音、ミュートなどのいくつかの音を使い分け、中東のリズムを表現します。2拍子、4拍子の他、9拍子、10拍子といった変拍子も多く、例えば、アラブの古典曲などでよく使われるセマーイという10拍子のリズムは、3 + 2 + 2 + 3という組み合わせで表現されます。

3 中東の文化

I アラブとイスラーム

中東とは、大体西アジアとアフリカ北東部あたりを指し、その中でアラビア語を話す地域をアラブと言います。したがって、イランやトルコは中東にあっても、それぞれペルシア語とトルコ語を話すため、アラブとは言えません。また、アラブ人であっても、ムスリム（イスラーム教徒）でない人もいますし、中東以外のインドネシアやマレーシアなどにも、ムスリムは多く存在します。

イスラームは、アッラーを唯一の神とする一神教で、予言者ムハンマドを通して下されたクルアーン（コーラン）を信仰の柱としており、ユダヤ教やキリスト教とも起源は同じです。日常生活では、信仰告白、一日5回の礼拝、喜捨、ラマダーン月における断食、メッカへの巡礼という五行を実践し、飲酒、豚肉食、利息を取ることなどが禁止されています。

また、音楽や踊りは好ましくないものとされ、モスクなどの宗教的な場所では禁止されていますが、様々な分派が存在するイスラームにおいては、音楽や踊りを実践することで神との合一を目指す、スーフィーと言われるイスラーム神秘主義の教団も存在し、多数派からは批判される一方、トルコのスーフィーの一つであるメヴレヴィー教団の旋回舞踏は、有名な観光ショーにもなっています。

II パレスチナで舞う

2010年、パレスチナにおいて地唄舞を舞う機会を頂くことができました。毎年10月に、ウエストバンク（ヨルダン川西岸）に位置するタイベ村では、オクトーバ・フェスティバルと呼ばれるイベントが開催され、多くの観光客で賑わいます。タイベ村は、パレスチナで唯一100%キリスト教徒の村で、パレスチナ初の「タイベビール」という地ビールも生産されています。

屋外のステージでは、地元の様々なミュージシャンや舞踊団がパフォーマンスを披露し、その中の一つとして私も地唄舞を舞わせて頂きました。正直アラブ人に地唄舞がどう映るのか不安もありましたが、パレスチナで日本の文化を紹介できるだけでも意義のあることと思い、なるべく基本に忠実に舞うよう努めました。ステージから観客の様子を見てみると、退屈そうにしている人や眠そうにしている人など様々でしたが、それでも終わった後、素晴らしかったと声をかけてくれる人もいて、貴重な経験となりました。また、後から聞いた話ですが、私がステージに上がる際に、脱いだ草履を揃えたのを見て、そのことに驚嘆していた人もいたらしく、何気ない所作にも文化が現れるものだと興味深く感じました。ちなみにその時の映像は、こちらでご覧頂けます。（<http://youtu.be/4u31FUu6Wh4>）

Ⅲ クルアーン

イスラーム圏では、礼拝の時間になると「アザーン」といわれる呼びかけの音が町中に響きます。私も最初にこれを聞いた時には、何事かと驚いたものでしたが、その独特の抑揚を持った声は、次第に心地よく胸に響いてくるのでした。「アッラーフ アクバル アッラーフ アクバル（アッラーは 偉大である）・・・」

そして礼拝の際には、イスラームの聖典であるクルアーンが朗読されます。クルアーンは、当初は口伝で伝えられていたため、その音の並びが非常に大切であるとされ、現在まで一文字も変わることなく伝えられて来たと言われています。このように、厳格に守られ伝えられて来たクルアーンの朗読は非常に美しく、言葉を越えて大きな力を持ったもののように感じられます。

多くのムスリムが、子供の頃からクルアーンの朗読を学びますが、アラブで最も偉大な歌手とされるウナム・クルスームも、クルアーンの朗読によってアラビア語の正確な発音が形成され、歌唱力の基礎になっていたとも言われています。アラビア語には、28個のアルファベットがありますが、ダードと呼ばれる音はアラビア語にしかなく、正確な発音はアラブ人にしかできないと言われ、アラブ人のことをダードを発音する人々と表現することもあります。このようなアラビア語の発音は、クルアーンの朗読において忠実に守られ、音楽とは明確に区別されなければならないものではありませんが、アラブ音楽におけるマカームとも深く関わっているのではないかと思います。

4 日本とアラブ

初めてアラブを訪れた多くの日本人が、その文化の違いに多かれ少なかれ戸惑うことと思います。アラブでは物事が予定通りに進むことはあまりなく、計画を立て

ることが困難です。誰かと約束をすれば、しばしば「インシャアッラー（神の思し召しのままに）」という言葉が返ってきます。自分はそのために最大限努力するが、世の中には、人間の力ではどうしようものない不確定要素がたくさんあり、それが実際に実現されるかどうかは神のみぞ知る、という意味合いの言葉です。

日本人であれば、不確定要素をできるだけ取り除き、予測を立てて準備に努めますが、アラブ人は不確実な未来に備えるよりは、その場の状況に応じて対応する傾向があるようです。どこか適当に思えるこの言葉ですが、言い換えると、自分の力の限界を知り、自分の考えの及ぶ範囲など所詮不十分なものであるという謙虚さの表れとも言えます。どの状況においても対応できる一つのシステムを作り上げようとする日本人と、状況の変化に自由に対応していこうとするアラブ人、このことは、型を重視する日本の踊りと、即興性を重視するアラブの踊りによく表れているのではないかと思われます。

5 最後に

地唄舞とベリーダンス、一見全く異なるように見える踊りですが、自分の中では別々のものであるという意識はあまりありません。同じ根源を持つものが違った形に現れたものであり、むしろ対照的な両者を知ること、一つのところに偏ることがなく中庸でいられると感じています。

また、両者の動きについて深めていくにつれ、人と文化と舞踊との関係性や人の体の可能性について、より深く考えられるようになりました。外に現れる形は異なりますが、体のあらゆる部分をコントロールし、完全な軸をつくっていくという方向性においてはどちらも共通しており、その部分の鍛錬が舞踊の本質であると考えています。その過程として、地唄舞では、型を忠実に守り、ベリーダンスでは、型を抜けてその場で自由に体を呼応させてゆきます。そしてそれらはいずれ、一つのところへ収束していくものであると考えています。

(はなさき・さみや 舞踊家)

【著者プロフィール】花崎 さみ八

広島県出身。東京大学教養学部卒。

ベリーダンサー（saamiya）、花崎流地唄舞名取、合気道二段。

2009年パレスチナにて地唄舞演舞、2010年世界舞踊祭にベリーダンスで出演、2011年台湾にてベリーダンス公演。毎年神社にて巫女舞を奉納。

時々、フルマラソンを走り、トルコの弦楽器サズを弾く。

音楽と舞踊

作曲 高橋 通

音楽の始まりは何だろうか？鳥や獣、昆虫も声や音を発する機能を持っているし、他の動物にも音を出すものがあるらしい。植物については、よく分からないが、風に吹かれて木の葉が音をたてることもあって、多くの生き物が音と無縁ではない。音楽と言う定義自身が難しいが、鳥は我々人間が音楽的に感じるような囀りをもっているし、犬が音楽に合わせて吠えることも知られている。知性豊かなヒトは、声を出し、それに表情を加える術を持っている。人間が言葉を獲得する遙か以前に、音声に抑揚をつけて感情を表現することはあったと推測される。動物では、鳴き声の様子で危険を知らせ、仲間に情報を伝えているが、ある種の鳥では、いくつかの囀りのパターンを組み合わせて、より細かな情報伝達を行っているものがある。

感情を音声に込めることで、ある種の旋律と呼べるものが出来たであろうし、動物や鳥、虫の声、あるいは自然現象の音を真似て声を出すこともあったと推測出来る。この辺りが歌や音楽の始まりではなかろうか。

一方、身体の動きはどうであろうか？例えば、驚いたり、恐ろしい目に合うと身をすくめる。嬉しい時には体を震わせて喜んだり、飛び上がったたりする。勿論、動物等の動きの真似をすることもあったであろう。この身体的な表現には、音を伴うこともあったはずである。この身体的な身振りや動きが、踊りの始まりであることは十分に推測出来るし、音楽の始まりと密接な関係があることも疑いにくい。

人の動きには、儀式と関連するものもある。儀式には、音が入り入れられていることも多い。さらに、文明が発展してくると、演劇等が行われるようになってくる。その中で、音（音響）や音楽は重要な働きを占めてくる。オペラや舞踊は音楽と切り離せない。また、行進や体操等の動きには、音楽は必須とも言える要素になっている。さらに、演劇や芝居だけでなく、ドラマの中で音響や音楽が占める役割は重要なものになっているのを否定することは出来ない。

音楽や音響を伴わない身体表現だけのパントマイムなども存在するが、現代になってレコード、磁気テープ録音、CD等の音を記録する技術やラジオ放送等の音楽を配信する技術が先に発展したため、音（音楽）だけの表現が広まった。現在では映像技術の進歩によって、動きを伴った音楽と言うよりも、音楽や音響を伴った身体表現（演劇、映画など）が広がりを見せている。

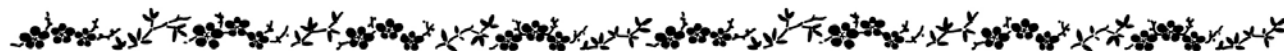
また、民族音楽の世界では大半が舞踊等の身体表現を伴っていることも見逃せない。情報が世界の隅々まで瞬時に伝達され、世界のあらゆるところから映像情報の発信が簡単に行えるようになった現在では、音楽と舞踊の結びつきは一層緊密になってきている。

この時に、動き等の身体表現と音楽のかかわり合いを真摯に考えることは、これからの音楽舞踊文化の進歩の上で重要なことだと思われる。

今回の特集では、音楽と身体表現のかかわり合いを、異なった立場の3名の方にお願ひして書いて頂いた。お一人は、舞踊学の専門家であり、オリンピックにも関係の深い国枝孝子先生に、お二人目は、作曲家であり、ラジオ体操の伴奏音楽を担当している加藤由美子先生に、もう一方はベリーダンサーであるとともに地歌舞の踊り手としても活躍されている花崎さみ八様に、夫々の立場でご自由にお書き頂いた。また、関連のコンサートも企画されているのでご来場頂きたい。

この特集が、舞踊、身体の動き、所作等と音楽の関わりについて、改めて考えるきっかけになれば嬉しい。

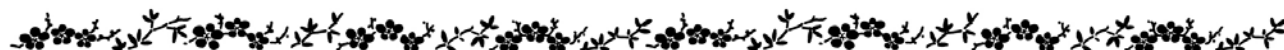
(たかはし・とおる 本会 作曲部会長)



舞踊情報

高2の菅井円加さん優勝=ローザンヌ国際バレエ-若手ダンサーの登竜門

【ローザンヌ（スイス）時事】若手バレエダンサーの登竜門として知られる「ローザンヌ国際バレエコンクール」第40回大会の最終審査が4日、スイス・ローザンヌで行われ、神奈川県出身で東京都町田市の私立和光高校2年生の菅井円加さん（17）=佐々木三夏バレエアカデミー=が優勝した。菅井さんはコンテンポラリーダンス部門でも優勝。初の海外遠征で快挙を成し遂げた。同コンクールでは1989年に熊川哲也さんが金賞、83年に吉田都さんが入賞している。菅井さんには奨学金と希望するバレエ学校に1年間留学する権利が贈られる。菅井さんは授賞式後に取材に応じ、「優勝は信じられない。まだ踊りの夢の中にいる感じです」と喜びを語った。審査の舞台では「落ち着いて気持ちよく踊れた」と笑顔いっぱいであえた。菅井さんは3歳からバレエを習い始めた。厳しい練習でバレエをやめたい時もあったが、「自分には踊る楽しみが必要。これがなかったら今の自分はない」と話した。英名門バレエ学校バーミンガム・ロイヤル・バレエへの留学を希望しているという。審査員を務めた吉田さんは「クラシックバレエとコンテンポラリーダンスの両方で素晴らしい演技ができた点が大きく評価された」と語った。同コンクールは、プロを目指す15～18歳の若手ダンサーの発掘と育成が目的で、73年から開催されている。（時事通信社：2012/02/05）



NHKの花輪一郎さんが亡くなった。

花輪さんは、私たちの年代の者が若い時たいへんお世話になった。花輪さんは、NHK洋楽班の人で、戦中派の趣味か、大正インテリの好みか、外国のpops音楽が大好きだった。それも豪華版型、大編成オーケストラの音楽が好きだった。ご自身の担当番組「音楽の花束」では、大編成オーケストラを動員し、主にアメリカ製の音楽を録音放送した。東京フィルハーモニー、通称、東フィルがまるごと、金管三人、打楽器四人で出ることもあった。私たちは学校を出るとすぐに花輪さんの番組の仕事を頂いた。奇妙なことは、市販のLPレコードを預けられて、そこからスコアを楽譜に起こす仕事が多かった。それなら、そのレコードをそのまま放送すればいいわけだが、ナマ演奏で録音放送したかったというのが花輪さんの好みだったのだろう。

何より得る所が多かったのは私たちである。大編成orchestraですぐに実験できる、こんな都合がいいことはあるものではない。ここで私は二年半くらい修行を積み、orchestrationでは存分に腕をきたえることができた。こういう技術の修行は、現場で、実際に演奏する人を相手に修練しなければ身につくものではない。こんな大編成orchestraを動員したらどれだけの経費がかかるものか。編曲料は安かったが、この成果を考えれば、途方もなく高価な勉強をさせてもらったことになる。のちに大成した作曲家たちが何人もここを修練の場として仕事をさせてもらった。林光や矢代秋雄などもその中にいた。

作曲家ばかりではない。指揮者もまたしかりである。いまは天下の小沢征爾も、デビュー以前の無名の時に花輪さんのこの番組で指揮をした。岩城宏之もまたしかりである。指揮者にすれば、本物の大編成のorchestraを指揮する体験ができるのだから、作曲家同様、無類の実戦訓練ができたのである。当時のNHKはこういう所で意外な文化貢献をしていたのである。いまは、せちがらい時代になったから、こういうことはもうないだろう。時代は変わった。こういう時代があったことを後世代の人たちも知っておいてよい。

花輪さんは、仙台の人で、東北大学で国文学を学んだ人であった。私たちの機関誌『音楽の世界』に回想記を書いて頂いたことがある。それはのちに単行本となり、NHKの出版協会から出た。クラシック音楽分野でのちに大物になった人たちが若き日に目につかぬ所で腕を磨く場を作ってくれたのが花輪さんであった。一時、NHK仙台局に戻られたことがあり、私は、毎年、放送劇の仕事を受け仙台まで車で出かけたことが何年もあった。当時はまだ高速道路がなく、国道4号線を長時間かけて往復したが、それもまた楽しみであった。

すでに90歳を超えておられたから、天寿の全うで、お祝いをさしあげたい実感である。有難うございました。

(すけがわ・としゃ 本会代表理事)



花輪一郎著『青春のNHK音楽部』

地域に支えられて

— シャガールから田舎のプレスリーまで —

天下国家を論じもするが、一方で近隣のことに興味を向けるのが、世間一般というものだろう。地域の新聞には、そんな身近な関心事が集められている。

私の暮らす松本を核に、発行部数6万8千の地域紙がある。タブロイド版28面～34面のページだ。1千万人もが暮らす大都会では、拾われることがないような身近な話題が満載である。

先日、ページを繰っていると一枚の写真が目にとまった。掲示板を見つめる男性の写真だ。その視線の先にポスターが貼ってある。その数4枚。その1枚に私の名前があるではないか。



手作りポスターと御子柴館長

記事の見出しは、「自作タイトルで催し案内」というもので、松本市寿（ことぶき）地区の公民館の自主事業の告知ポスターを、館長が手作りしているという内容である。

手作りポスターは、館内ロビーに掲示されている。模造紙半折（110cm×40cm）にポスターカラーで手書き。パソコンで手軽に仕上げられたものとは違い、筆の手書きと

いうところが味となって、訴求力が強く今時めずらしいと、評判になっているというのだ。

住民票の発行など、役所の支所の便利供与も受けられるので、公民館への住民の出入りも多い。そのロビーにあるポスターだから目立つ。ポスターには、催しのタイトル、日時、内容など色を替え、書体に変化をつけて、パッと中身が飛び込んでくる工夫がこらされている。

公民館の催しはどこでも参加者を募るのに苦労するのだが、このポスターのおかげもあってか、ここではその心配はなさそうである。

この公民館で、私は人権コンサートを依頼されているのだった。偶然、ポスターの話題の記事の中の写真で、こんな形で告知されていたのである。

ポスターを見ている男性はその館長さん。写真の中のポスターは4枚。その1枚に私の名前のポスター、私のとなりの1枚は、シャガールの名が入ったポスターである。シャガールはロシア出身、パリで活躍した世界的な人気画家だ。シャガールの展覧会が松本市美術館で開催される、その地域のイベントの案内なのだ。シャガールの隣りとは、少々気後れしてしまうのだが。

僕は田舎のプレスリー！と吉幾三が歌う歌謡曲がある。メジャーではないが、田舎ではモテモテだぞ！の諧謔（かいぎゃく）が笑いをさそう。シャガールと同等に扱われる私の気分でもあるが、私の場合は「恐縮です」というところか。

そもそもこの記事は、手作りポスターが評判！というもので、その写真の中のポスターの1枚に私の名前が出ていたというだけの話なのだが。その日、出先のあちこちで声をかけられたのであった。いかにも田舎のプレスリー！の面目躍如じゃないか。

ずいぶんと長く景気が低迷している。その影響をもろに受けるのが、音楽などの芸術、情操分野であることは身に沁みているが、このごろは中央からの著名な演奏家でも例外ではない。多くは、寒々しい集客状況で、入場券が投げ売り、または只券としても配られている。それでも満席にはならないこともあり、景気と連動して、人々の気分も落ちこんでいるのかもしれない。

それでも地域の演奏家には地域紙という強い味方がある。どれほど、その紙面に助けられていることか。先の新聞記事の中のポスターの写真の中にまで、目を留めてくれる人がいるのだから。

さて、このほど2012年「世界の都市生活費ランキング」が発表された。英経済誌エコノミストの調査・研究機関EIUからである。

それによると、スイスのチューリッヒが、昨年1位の東京を抜きトップになったとのこと。その調査は食品や衣料費、交通費など160種類の価格を指数化して、比較したものだという。

最近、チューリッヒでの留学生生活を終えて帰国した若いピアニストに聞いてみると、そのとおりのらしい。が、それは稼ぎのない

学生だからで、市民はゆったりした気分で、現にホームレスを見ることも少なかったという。

それにコンサートなどは安価で、気楽に参加できた。むしろ帰国してからのほうが、足を運べない、というのだ。文化の違いとかたづけられてしまうのでは、いささかさびしい。

年金が減額され、消費税の増税が進められようという政治状況であるが、おそらくこれは不景気に拍車をかけることが容易に想像できて、私などそれだけで気分が落ちこむ。東京が暮らしにくい都市第1位に返り咲くのは、もはや時間の問題。音楽の状況はますます悪化することも自明のことである。

ともあれ今のところ、私はシャガールの横に、名前をならべて活動できるのだが、これは地方小都市ならではのこと。大都市の音楽家はどうなるのだろうか。いっそのこと、都会（まち）を捨てて、田舎に帰ろう！とは行かないものか。政治にふりまわされて、つくづく疲れる。

それで先のポスターのコンサートだけど、大会議室満席（といっても80名）で、楽しんでもらったようである。あけて翌日、ニュースとして、同じ地域紙が大きくとりあげていた。

拍手の中、かの手作りポスターが館長から手渡されて、なんだかととてもうれしかった。吾が家の壁に貼って、今それをながめている。

.....
【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 27 回〕 名曲を皮肉る話

作曲家というのは、「他人と同じことはしない」を基本姿勢とする人種なのではなかろうか。歌謡曲などでは時折、似ていることからくる盗作騒ぎが話題になるが、クラシックの世界では、それをやると模倣ととられるか垂流とされるか、どちらにしても个性的でないと見られて歴史には残りにくい。だから何を書けば个性的か、あれこれと他人の作品には注意しているのではなかろうか。同時代の曲はもちろん、歴史上の曲についてもかなり幅広く。

したがって頭のいい人なら、時に「こんな曲なら、自分だって書ける」とか「ひとつ手を加えて、変わった形にしてみよう」などと考えることがあっても、決しておかしくない。一段上に立って他人を見る。皮肉っぽい目で、ものを見るというわけである。

実際、そうした皮肉っぽい狙いで書かれた曲は探してみると少なくなく、例えばアマチュア作曲家の横行を皮肉ったモーツァルトの「音楽の冗談 K. 522」（バランスが悪く、あちこちで音を外す）とか、オッフエンバック・ベルリオーズ・ロッシーニらの曲を変形させて使うサン＝サーンスの組曲「動物の謝肉祭」などは、その典型といってよいだろう。あるいは「存在しても聴かれなくてよい」ことを狙いにして書かれたエリック・サティの「家具の音楽」とか、埋もれた人の作曲と偽って発表されたフリ

ッツ・クライスラーの一連のヴァイオリン曲（「ポルポラの様式によるメヌエット」「プニャーニの様式による前奏曲とアレグロ」ほか）、一音も発しないジョン・ケージの「4分33秒」なども、もしかしたら同じ皮肉がもとになって書かれたのかもしれない。



『天国と地獄』の作曲者：オッフエンバック

じつはもう一つ、オペレッタの世界にもおもしろい作品があるので、ご紹介してみようと思う。題名を聞けば誰もがご存知の、ジャック・オッフエンバック（1819～1880、フランス）の「天国と地獄」（1858年）である。

どういう作品かという、ギリシャ神話の中でもひととき有名な「オルフェオとエウリディーチェ」の話は現代化し、パロディ化したものなのである。この神話は作曲家たちにはよほど興味をそそったものらしく、最初期のペリとジュリオ・カッチーニによる「エウリディーチェ」（1600年）をはじめ、モンテヴェルディ、グルックらがオペラ化しているが、私たちに親しいのは多分グルックの「オルフェオとエウリディーチェ」（1762年）だろう。彼の作品では結末を悲劇とせず愛の神アモーレの救済によるハッピーエンドとなっているが、神話の話というのはこうである。

豎琴が上手なオルフェオと美しいエウリディーチェという夫婦がいた。しかしある時、妻は毒蛇に噛まれて死んでしまう。泣き崩れる夫が神に祈ると、愛の神アモーレが現われ「霊界へ行き、妖怪や死霊たちを豎琴で感動させられれば、妻を取り戻せる。ただし、地上に戻るまでは妻の方を振り向いてはならない」と告げる。それに従ったオルフェオは次々と試練に耐えて、無事妻と再会。帰途につくが、妻の「どうして振り向いてくれないの？」という再三の言葉に、思わず振り向いてしまう。こうしてオルフ

ェは永久に妻を失ってしまった——というものの。

オッフェンバックの「天国と地獄」（邦訳。原題は「地獄のオルフェ」全4幕）では、以上の話が次のように変形してしまう。オルフェオは音楽院長だが、妻に飽きて羊飼いの娘クロエに、妻エウリディーチェも同じく羊飼いのアリステに夢中という、ダブル不倫！

「世論」という制裁役が、彼らを諷める。アリステはじつは地獄の王で、夫に暗示をかけ妻が噛まれるよう蛇を仕掛けさせる。噛まれて地獄へ運ばれた妻に、夫は大喜びするが、世論に諷められて救出すべく、天国の神ジュピターに助けを請う。ジュピターは地獄へ行くが、エウリディーチェを見て一目惚れ。地獄にも飽きはじめて彼女と駆落ちをしようとする。そこへオルフェオが世論とともにやってくるので、仕方なく2人を戻すことにするが、途中で振り向かぬオルフェオに腹を立て、雷をドカン！結局、エウリディーチェはバックスの神殿の巫女となり、当惑する世論をあとに、オルフェオは喜々として地上へ戻っていく。現実の男女はこんなものさ！といった風刺なのだろう。なお、「序曲」は、劇中旋律をもとにしたカール・ビンダーの編曲である。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



戦時下のベートーヴェン

間もなく東日本大震災から丸 1 年を迎える。震災直後の数週間の状況は、まさしく非常時そのもので、心を塞ぐ重苦しさは筆者の世代では未体験の戦時下に似ているのではないかと思ったものである。そんな時、心の支えとなったのは音楽を始めとする芸術鑑賞だった。

先日、仲間と共同主宰している SP レコード・コンサートでベートーヴェン特集を企画した際、興味深い事実気が付いた。第 2 次大戦中、枢軸国のドイツも、敵対するアメリカ、フランスなどの連合国側も、ともにベートーヴェンを録音していたことである。



ドイツでは演奏会、放送、レコードで盛んにベートーヴェンが演奏されたようだ。このことはフルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルの戦時中の放送録音によるベートーヴェン作品が数多く CD 化されていることで知られていた。今回のコンサートでは 1941 年 5 月録音のカバスタ指揮ミュンヘン・フィルによる《コリオラン》序曲、1940 年 10 月録音のフルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルによる《カヴァティーナ》の SP レコードを演奏した。

対して連合国側では、ナチスを嫌ってアメリカに移住したブッシュ四重奏団が 1941 年 6 月に弦楽四重奏曲第 13 番をニューヨークで録音。また、フランスでは 1944 年 6 月にマルグリット・ロンがピアノ協奏曲第 5 番《皇帝》を録音。ともに SP コンサートで演奏した。

こうした事実は、ベートーヴェンの音楽が時代や地域、思想信条の違いを超えた何ものかをもっていることを証明しているのではないだろうか。そして、演奏自体も、それぞれの音楽家がベートーヴェンの音楽と真正面から向き合ったものを感じられた。ちょうど、われわれが震災をきっかけに、改めて自分の社会的責任に思いを新たにしたように。

戦時下の人々は、これらの SP レコードをどのような思いで聴いたのだろうか。筆者は SP コンサートの司会をしながら、深い感慨に襲われたのだった。

●ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第 13 番変ロ長調作品 130～第 5 楽章カヴァティーナ 〈写真 前ページ〉)

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
[独 Telefunken SK3104 (SP)]

1940 年 10 月 15 日、ベルリンでの録音。フルトヴェングラーの戦時中の放送録音は数多く残されているものの、純粹にレコード用録音のベートーヴェンはこの 1 枚のみ。それも心の慰めとなるような《カヴァティーナ》を選んだところに筆者は興味をもっている。



●ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第 5 番変ホ長調作品 73《皇帝》 〈写真 左〉

マルグリット・ロン (ピアノ) シャルル・ミュンシュ指揮パリ音楽院管弦楽団
[仏 Columbia LFX679～83 (SP)]

1944 年 6 月 11 日、パリでの録音。当時のパリはナチス・ドイツ占領下にあったが、著名音楽家はパリに残り、音楽により同胞を励ました。1943 年、ロンはヴァイオリンのティボーとともにフランスの若手音楽家の登竜門ロン＝ティボー・コンクールを

創設。そのような状況下の、貴重な録音である。

.....
【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」(アルファベータ)を上梓。



読者の皆様へ

本誌では読者の皆様のご意見をお待ちしております。ご意見をお寄せになりたい方は最大 1000 字以内にまとめて、編集部へ郵送下さるか、下記のメールアドレス宛にお寄せ下さい。

メールの宛先： yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

第4回フランス歌曲研究コンサート ～ベルリオーズとフォーレの夕べ～

第4回フランス歌曲研究コンサートが、第1～第3回と同じく、中目黒GTプラザホールにて、1月29日（日）午後5時から開催されました。実は当初の計画では、昨年11月あるいは12月の開催を予定していたのですが、ホールを確保出来ず、2ヶ月遅れて本年1月の開催となりました。本年はドビュッシー生誕150年に当たり、そういう点も考慮し、ドビュッシーの音楽作品と、過去3回で取り上げられなかった、ベルリオーズの歌曲でプログラムを組むこととなりました。

前半の部は、ベルリオーズの歌曲集『夏の夜』作品7の全6曲で構成され、“ヴィネラル”、“ばらの精”、“入り江のほとり”、“君なくて”の4曲が鎌田亮子（ソプラノ）と前田明子（ピアノ）で、“墓地にて”、“未知の島”の2曲が湯川亜也子（メゾ・ソプラノ）と白取晃司（ピアノ）により演奏されました。この曲集をソプラノの輝かしくドラマチックな声と、メゾ・ソプラノの豊かで深みのある声の両方で聴けたことで、作品のもつカラフルで劇的な表現世界が、さらに広がったように感じられました。その後、筆者の12分程度の小講演『劇的なベルリオーズ、詩的なドビュッシー』で前半を終わり、15分ほどの休憩をとって、後半に入りました。

後半は全てドビュッシーの作品で構成されました。最初は今回出演の全歌い手を動員して、20才頃に作曲した若々しく軽快な六重唱曲『春のあいさつ』が、演奏されましたが、とても瑞々しく魅力的なアンサンブルでした。可愛らしくソロのパートを歌ったソプラノの小木曾実奈、四手の伴奏を担当した、稲葉千恵、森田真帆もアンサンブルを盛り上げていました。

続くプログラムは独唱曲で構成され、まず、北風紘子（ソプラノ）と稲葉千恵のピアノで、最初期の作品“星の夜”と、2つのロマンスが歌われ、次に小木曾実奈（ソプラノ）と稲葉千恵で、ベルレーヌの詩による『艶やかな宴』全3曲が演奏されました。北風紘子の歌は生真面目すぎるように感じさせるところもありましたが、繊細で上品な雰囲気を出していましたが、小木曾実奈の歌は、陰翳表現という点ではまだもの足りないものの、高い声は透明感があり聴き手を魅了するものがありました。次に、同じ詩人による『忘れられた小唄（全6曲）』のうち、“それはやるせない夢心地”、“私の心は涙で濡れている（巷に雨の降るごとく）”、“木々の影”を、佐々木寿子（ソプラノ）が、“木馬”、“グリーン”、“スプリーン（憂鬱）”を、坂本久美（ソプラノ）が、森田真帆のピアノで歌いました。

佐々木寿子の歌は、どの音域でも安定した柔らかな声で歌われ、そこはかとない詩情を漂わせておりましたし、坂本久美はしっかりした音程で、詩の理解を踏まえた知的で端正な表現を聴かせてくれました。

最後にメゾ・ソプラノの湯川亜也子と白取晃司のピアノで『ビリティスの歌（全3曲）』が演奏されました。この作品はドビュッシーの個性がよく現れた最盛期の

佳作ですが、豊かな声と成熟度の高い表現力をともなった湯川の歌唱とそれに答えた白取のピアノは、この晩の最後を飾るに相応しい魅力的な音楽を紡いでくれたと思います。

ところで、今回のコンサートの運営について、私は殆どタッチせず、チラシ作成からスケジュールの管理まで、殆どすべてを若い人達に任せました。企画の決定が遅れ、その結果チラシ作成なども遅れ、観客動員も十分とはいえませんでした。コンサートの内容を含め、それ以外の面では、若い人達が頑張っってよいコンサートに仕上げたと思います。また、出演者たちの師である秋山理恵氏の指導もあり、詩の日本語訳はすべて出演者自身によって行われましたし、色々な面で勉強の成果が窺えました。



終演後の集合写真：前列は6人の歌唱者と秋山理恵氏&私、後列は4人の伴奏者

ただ、この企画をより魅力的に発展させて行くためには、様々な工夫の積み重ねが必要だと思います。例えば出演者に門下生以外の声楽家を客演として迎える。器楽曲も少し挟んでみる。詩と音楽の関係に焦点を当て、同じ詩に異なる作曲家が書いた曲を並べて演奏してみる。あまり知られていない作曲家の作品を取り上げてみる。など、ざっと考えただけでも、色々な可能性があると思います。

しかし、特に必要なのは、自分達の音楽を聴いてくれる人、受け入れてくれる人を増やす工夫と努力ではないでしょうか。会の外はもちろんですが、本会の中にもファンを多く持ち、多くのお客を動員できるベテランの演奏家が少なからず存在します。若い人達には、そういう人達の芸術家としての姿勢、日常的な努力から多くを学んでいただきたいと思います。今回は、なかなか充実したコンサートだったのですが、お客は50人強と少なめでした。そういう中で10人を超える会員が聴きに来てくれました。多分、多くの会員が若い人達の成長を期待しているかだと思います。まことに、有り難いことと感じました。そのような人達の期待を胸に納め、さらなる精進を重ねていただきたいと願っております。

(コンサート実行委員長 中島 洋一)

エレクトーン・オーケストラとは？

作曲／エレクトーン：西山淑子

エレクトーン（以下 EL と表記）というと、一人アンサンブルができるお遊び楽器というイメージを持たれている方が、まだまだ多く、この楽器でコンチェルトやオペラの伴奏ができるという事は意外に知られていないのが実情ですが、EL を使ったコンチェルトやオペラの公演は、この 20 年ほどの間に非常に増え、もはや珍しい事ではなくなりました。

今度、3月25日に、本会では久しぶりの『コンチェルトと歌曲の調べ～エレクトーン・オーケストラによる～』が開催されるにあたり、エレクトーン・オーケストラとはどのようなものか、まだご存じない方のために、作り上げてゆくプロセスをご紹介しますので頂こうと思います。

スコアリーディング奏法

オペラやコンチェルト、またオーケストラ伴奏による歌曲など、原曲がオーケストラの場合、通常、EL 奏者はフルスコアを見て弾きます。人数＝台数により、2人の場合、管楽器と弦楽器。3人の場合、木管楽器、金管楽器、弦楽器。4人の場合、木管、金管、高弦、低弦。という風に分けるのが一般的です。

が、一人では弾けない部分がある場合（和音が1オクターブ以上で片手では弾けない。要素が多すぎて一人では間に合わない。など）お互いにやり取りして、無理なく弾けるようにパート分けをします。

この作業（？）にかなりな時間がかかるのですが、お互いのパートが見えているので、アンサンブルがとてもやりやすく、指揮者やソリストとのコミュニケーションもとてもスムーズに進みます。そして、書き直すという手間が省けます。

『仕込み』という作業

自分の弾くパートが決まったら、その音（音響）になるように、音を作ります。これを私たちは『仕込み』と言っています。膨大な数の音色からその曲のその部分に最もふさわしい音色を選び、組み合わせて行きます。例えば、弦楽器には35種類の音色があり、その中から2～4個の音を選び、重ねて、その部分にふさわしいニュアンスの音を作り出す。と言った具合です。スコア上の楽器の組み合わせが変わるごとに別の組み合わせを作っていきます。さらにイメージに合った音になるように Edit する事もあります。そして、音色だけではなく、PANNING（各楽器の定位）や REVERB（残響）タッチトーン（打鍵の強さに弾き方による音色変化）などの設定をします。作った音色は、メモリーボタンに逐一メモリーし、順番を設定して、仕込み終了となります。

合わせ

仕込みが終わると、自分のパートが完璧に弾けるように練習し、EL だけの合わせをします。ここで、お互いのバランスを整えるため、再び設定を変更する必要があります。そしてようやくソリスト、指揮者との合わせの段階となります。

ここでまた当然のことながら、音色や設定の変更が出てきます。仕込みという作業には終わりが無いのです。

ここでちょっとまとめ知識

よく、演奏中にどうやって音色を変えるの？と質問されますが、それは、右足。音量変化をつけるエクスペッションペダルの両サイドにフックが付いています。その右側フックを演奏のタイミングに合わせて、右足の小指の辺りで押して行きます。左側フックは、リズムの on, off などに使います。つまり、右足は、上下運動をしながら左右にも動かしているのです。奏者の右足に注目して見て頂くと面白いかも知れません！

EL 奏者に求められるもの

オーケストラの質感を再現する為には、◆スコアリーディング◆あらゆる楽器についての知識◆アナライズ力。そして、◆色々な演奏テクニックを身につけること。などが挙げられますが、もっとも大切なのは、自分で作った音、自分の出した音が、これで良いのか判断出来る耳と感性を持つ事。つまるところ“耳を磨く”ことだと思います。そういう事が総合されて初めて、オーケストラをも超える EL オーケストラとなるのです。

音作りだけ良くても、演奏だけ良くても片手落ちです。相互作用で初めて良い音楽となる楽器なのです。

EL 奏者は、日々気の遠くなるような作業を繰り返すのですが、コンサートが成功し、ソリスト、共演者に喜んで頂けて、お客様に感動して頂けたら、それまでの苦勞はどこへやら。それによって得られるものは、何にも代え難い一生の宝物となるのだと信じて、本番に向け、精進を続けるのであります。

どうか、その成果を皆さまの耳で確かめて頂けますよう、ご来場をお待ちしております。



『コンチェルトと歌曲の調べ～エレクトーン・オーケストラによる～』

2012年3月25日(日) 16:00開演 ヤマハエレクトーンシティ渋谷

チケット：¥3,000 問い合わせ：03-3381-6691(戸引) 03-3955-6249(西山)

(にしやま・よしこ 本会作曲部会員)

深沢亮子ピアノリサイタル～ブリュッセル弦楽四重奏団と共に～

音楽評論 浅岡 弘和

我国ピアノ界の重鎮深沢亮子がベルギーの名四重奏団、ブリュッセル弦楽四重奏団（第1ヴァイオリン：フィリップ・コッシュ、第2ヴァイオリン：志田とみ子、ヴィオラ：トニー・ネイス、チェロ：リュック・ドゥエーズ）の来日に合わせ、モーツァルトのピアノ四重奏全2曲をメインに再び共演した。

今回はヴィオラ奏者が変わってしまったが、前半の1曲目は深沢、志田、ネイス、ドゥエーズによるモーツァルト／ピアノ四重奏曲第2番変ホ長調K493。まろやかでブリリアントなピアノがまず素晴らしく、滋味溢れる弦楽陣共々、モーツァルトの愉悦を満喫できた。曲が素晴らしいだけに久々に深沢のモーツァルトを堪能したという感想を持った。

次は深沢のピアノ独奏により助川敏弥「松雪草」（2010）が作曲者自身の臨席の下に再演されたが、これは1楽章形式のソナチネの形を取っており、助川ならではの調性音楽と無調との不思議な混在といい、童心のような静謐さを感じさせる簡素な佳曲。深沢の演奏も去年の初演時よりいっそう透徹した名演になっていた。

後半はまず現代物で、ベルギーの作曲家ブノワ・メルニエの弦楽四重奏曲第2番「蜂と蘭」（2010）より第1楽章が演奏されたが、これは全2楽章の無調作品。虫媒花であるヨーロッパの蘭の花には、雌蜂そっくりに擬態し雄蜂をおびき寄せて交尾を誘い、受粉を成功させる品種があるが、おそらくこの作品の題もそれを念頭に置いてのものであろう。無調作品だが遅いテンポの弦のしっとりした響きが深い思索を感じさせた。

最後は再びモーツァルトで、深沢、コッシュ、ネイス、ドゥエーズによるピアノ四重奏曲第1番ト短調K478。モーツァルト宿命のト短調作品だけに最初からテンションの高い熱演が繰り広げられ、名手4人の真摯な激突は実に聴き応えがあった。またこの作にはモーツァルトの醍醐味であるトリステスアラント（はつらつとしたかなしさ）が充満し、深い慟哭とモーツァルトのチャーミングな微笑みが共存している。深沢のピアノも作品が深ければ深いほど凄みを増し滅多に聴けない名演となった。結果、この作品がモーツァルト屈指の魅力作であることを改めて再確認した次第。 〈2012年2月23日、浜離宮朝日ホール〉

（あさおか・ひろかず 音楽評論家）

東日本大震災から1年を経て いま本会では

東日本大震災という未曾有の大災害と、福島原発事故という大事故に見舞われてから、3月11日で一年を迎えます。多くの人々にとって、あの衝撃と恐怖、悲しみは、いまだに深く心に刻まれているものと思います。一年前の3月11日は、第9回フレッシュコンサートの準備中で、大震災の後の原発事故、計画停電の実施などで、4月8日に予定していたコンサートの開催が危ぶまれましたが、関係者の熱意と努力によって無事開催に漕ぎつけ、コンサート開催時に実施した、被災者のための募金活動も、お客様の協力で、かなりの額を集めることが出来ました。

本誌においては、今年の4/5月にて、フレッシュコンサート関連の記事と並行し、大震災関連の記事を掲載し、また、6月号では時評『壊れたパンドラの箱』で、原発事故の問題点に触れております。また、7月号からは連載『福島日記』で、原発の被災地福島県で、音楽、アートを学ぶ、若者達の日常を紹介しています。

しかし、本誌における大震災関連の言論活動は、日本音楽舞踊会議に所属する会員全体の活動に比べれば、大きなウェイトを占めるものではありません。本会には様々な会員が所属し、会としての活動以外にも、個人として、募金活動をしたり、チャリティーコンサートを開いたりしております。

そのような活動を象徴する例として、3月17日(土)オリンパスホール八王子で開催される『福島原発被災者支援チャリティーコンサート』を紹介いたします。

それは、本会会員でピアニスト兼八王子音楽院長の広瀬美紀子さんと、その夫君で福島県出身の菅野善則氏が中心となり開催するチャリティーコンサートで、プログラムにはクラシックの器楽曲から、シャンソン、ジャズボーカル、ビッグバンドまで含みます。多彩な演奏陣が多様な音楽を、福島原発被災者のために、思いを込めて演奏します。被災者支援のため、また楽しい音楽的時間を過ごすため、読者の方々がこのコンサートに足をお運びになることをお勧めいたします。

本誌編集長 中島 洋一

福島原発被災者支援チャリティーコンサート

出演者 フルート・ボーカル 神崎 愛/ピアノ 広瀬 美紀子
ヴァイオリン カレン・イスラエリヤン/チェロ 真衣
ジャズボーカル 夏実 泰代/シャンソン 藤田 順弘
2012年3月17日(土)14:00開演(13:30開場)
オリンパスホール八王子 入場料:2000円

主催 菅野善則(福島原発被災者を救う会)

共催 八王子東京パイロットクラブ、八王子音楽院

後援:八王子市社会福祉協議会、日本音楽舞踊会議、日本クラシック音楽協会、
(株)センシング研、(株)ムジカ企画

TEL ; 042-657-4282

URL:<http://www.ac.auone-net.jp/~s-musica/>

福島日記 (8)

作曲 小西 徹郎

届けられた祈り、言葉は”弔い”なのか、それとも”希望”なのか？



まもなく東日本大震災、そして多くに目を閉じてきた結果の福島原発事故から1年が経とうとしている。昨年5月から勤務し始めた福島県郡山市の国際アート&デザイン専門学校、このタイミングと場所に私は運命を感じ音楽を通じて「人間」に携わってきた。100キロ以上離れた埼玉の地から週2日郡山に通い、市民の生活を見ながら、そして登校してくる学生を見ながら実は様々なことを感じていた。そしてその中には疑問ももちろんあった。



勤務前、郡山駅の中のカフェで駅前を見ながらコーヒーを飲む。そこに、目の前にある市民の人々の生活のかけら、表情、そこには切迫した様子はあまり感じられず、日常として日常を過ごしている姿が目飛び込んでくる。学生たちと震災や原発事故、放射能について話し合う、そこには潜在的な恐怖がありながらもそれを隠す様子もなく、彼らにとっての恐怖はもしかしたら潜在的にも存在しないのではないのだろうか？そのようにも感じた。

東京都内や埼玉県内のパブリックスペースでは「食べて復興」と題して福島県内の野菜などの農産物を販売していた。流通しているものには何も問題はない、だから食べてほしい、私たちは農業を酪農を続けたい、避難している原発周辺の村の人々はまた戻りたいと願う人もいれば、新しい場所で生活を始めたいと願う人もいる。そんな中、時間が進むにつれて放射能の実態や線量、ホットスポット、また子供を中心とした内部被曝者数など現実が顔を出してきた。

震災後、原発事故の後、よく海外の友人から「勇気を持っている」「立ち向かっている」というキーワードの激励の言葉をもらう。だが多くの海外の友人は原発事故について、そこに住み続けて闘っていることについてはほぼノーコメントだ。私はそのことについて疎外感を感じるのだ。

日本においては「復興」という未来への希望を持って日々を生きているが本当に福島は復興するのだろうか？また帰村して農業を酪農を漁業を再開できるのだろうか？日本人はこれからもがんばっていく、という姿勢を保っているが、海外はもしかしたらもっともっとあきらめの目でみているのかもしれない。それが「勇気」「立ち向かう」というワード、また「ノーコメント」ということに表れているような気がしている。私の周りの海外の友人から届いた祈りや言葉、これは”弔い”なのか？それとも”希望”なのか？

私自身も震災後に学校に勤務することになった「タイミング」において運命を感じ、少しでも矢面に立ち、あきらめない心、向かっていく姿勢を貫きたい、そのように今も思っているが、現実においてその非常に非情で困難なことに対してそのことが果たして正しいのか？将来的に若い人にとっての将来にとって果たして正しいのか？津波による災害の復旧復興はあっても原発事故による将来の見通しはないのではないか？そのように感じてしまう時期があった。

そして駅中のカフェから目に飛び込んでくる市民の方々の日常、ここに、危険であるという意識、被災しているという意識はなぜ感じられないのだろうか？そのことがとても不思議でならない。悲しい出来事、深刻な出来事とその現実を覆うような笑顔、その笑顔の奥にある、重たい現実からの逃避、そんなことを感じてならない。

もしくは被災地の中や地元でも、現実に関する情報の伝わり方や受け止め方、考え方に温度差があるのだろうか。



震災のあと私は、今後最低でも5年はアートはほったらかしにされるだろうと考えていた。ところが震災から1ヶ月も経たないうちに歌による心の支援が始まり、被災地の方々はその歌を心に刻んだ。私は思った、こんなにすぐに歌が必要となる、人々が受け

た衝撃や心の傷は未曾有の深さであったのだと。私は学生に伝えてきたことの中で「今必要な音楽とは何か？」このことを問うてきた。流行ではなく、トレンドではなく、また芸術性というものに偏りすぎず、心に響く言葉と音楽、そういう歌をもっと世に出していくべきだと。

被災した、避難を余儀なくされた、被曝と不安、見えにくい将来、福島に住みそして音楽を学ぶ学生たち、彼らの中にこのやるせなさや怒りをきちんと持ってもらうこと。そしてその怒りや不安を忘れずに風化させることなく「今必要な音楽」をつむぎだしてほしい、そのように願う。私自身も襟を正して可能な限り現実に向き合い、でも常に先を、そして外を見ながらアンテナを張りながら生きていたい、そのように思う。

(こにし・てつろう 本会作曲部会員)

《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第六回 今井重幸 舞踊に魅せられた作曲家が育てた、異色の舞踊家列伝(3)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

六回目は、作曲家「今井重幸」として、現代舞台芸術の企画演出者「まんじ敏幸」として、長く舞台・舞踊界に関わってこられた今井重幸氏に、対談形式でお話を伺いたと思います。

■今井 重幸/まんじ敏幸

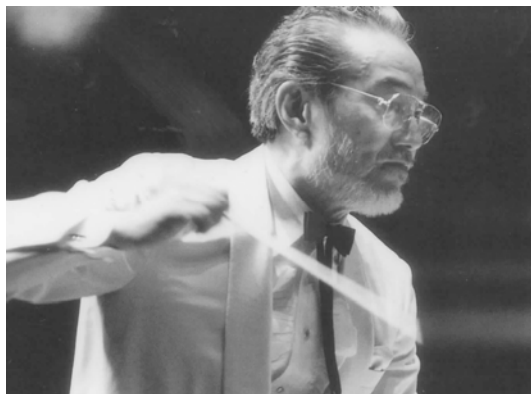
(作曲家、指揮者、舞台芸術企画・演出者)

1933年生まれ。1945年より独学で作曲を初め、交響詩「狂人の幻影」が縁となり、伊福部昭に入門。のち米国でエドガー・ヴァーレーズに師事。1953年NHKテレビの開局にともない、影絵・人形劇の制作スタッフとして参加し、「蜘蛛の糸」「杜子春」「走れメロス」などの教養番組音楽を作曲。映画では前田憲二監督、亀井文夫監督、手塚陽監督らの音楽を担当。舞台では東京芸術座、ソシエテ・デザール、青俳、文学座、人間座、薔薇座、アルス・ノーヴァなどの劇団に楽曲を提供。

また、まんじ敏幸の名で舞台演出家としても活動し、1956年、舞台に関連する若い芸術家たちとともに「現代舞台芸術協会」を設立、企画と演出を担当。

ヨネヤマ・ママコ(ダンス・マイム)、土方巽(舞踏—今井は土方の芸名の命名者であり、「舞踏」のジャンル名も今井による)、三条万里子(モダンダンス)、小松原庸子(スペイン舞踊)、長嶺ヤス子(フラメンコ舞踊)らを世に送り出す。

現代舞台芸術協会理事長、日本フラメンコ協会理事、東京造形大学造形学部・舞台芸術専攻元講師、日本大学生産工学部・建築工学科元講師。



(写真：小島竜生)

■橘川 琢(作曲家・日本音楽舞踊会議理事)

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。



■今井重幸と土方巽の出会い

—今回は「舞踏」の創始者、土方巽(ひじかた・たつみ(本名：元藤九日生)1928-1986) / 出生時の名前：米山九日生(よねやま・くにお) →土方ジュネ →土方巽と改名)さんとの関わりをお聞きいたします。

「土方との出会いは、新しい美術をやりたいという若い芸術家の卵のたまり場になっていた『赤坂芸術村』(豊川稲荷(豊川稲荷東京別院)の近くにあった赤坂芸術村(通称“赤坂

村”)。舞台実験室という研究会をおこした中に、池田龍雄(アバン・ギャルド美術の旗手)、河原温(現代美術家)、金森馨(のち劇団四季の舞台美術家)、高田一郎(舞台美術)、朝倉撰(日本画から舞台美術へ)、栗田勇(のち仏文の大家)等がいて。多くがその後、舞台美術家に転向してやるようになった。その連中が赤坂村に出入りしていても江田和雄(劇団人間座の創立者で茗荷谷の林泉寺・住職)に誘われて時々顔を出して、将来性のある若い舞台美術家を探していた。」

—ええ。

「当時、土方は安藤三子さんのところに一時身を置いていたが、そこをクビになって、その『赤坂村』をほっつきあるいていて。住む場所もなかったの、そこに住んでいる連中の所を点々としていた。そこでぼくを知って、ぼくの所へ現代舞台芸術に参加させてくれとたずねてきた。でも、住まいも無いし、フーテンのような状態。それで私のスタジオ、部屋の余裕のあった所に居候を決め込んで。それが1956年頃。それから約2年程、食べさせていた。」

—ほう、いきなりスタジオに約2年居候ですか。始まりからかなりインパクトがありますね。

■命名1・・・新ジャンル「暗黒舞踏(のちに「舞踏」)」

—今井先生は、現在の「舞踏(暗黒舞踏)」というジャンル名をつけられたことでも知られていますが、この点、舞踏創始者の土方さんとの関連についてお聞きしたいのですが……。

「最初、彼がスタジオに転がり込んできた時、方向性がまだ見えずいろいろ模索して居たようだったから『アバンギャルド・ダンス』という名称でやってゆくとアドバイスして。しばらく彼もそれでやっていたのだけれど、そのうち彼は、ダンス、舞踊という名前ではなく、別の名前が欲しい、つけてくれというので、『暗黒舞踏』という名前でやりなさいと、デビューさせた。その後で暗黒の文字を抜いて『舞踏』で通すようになった。

『舞踏』のそもそもの語源は、石井漠が外国から帰ってきた時、間違えたのか『舞踏公演』とつけていたんだね。でもその一回ですぐやめちゃった。それをぼくが覚えていて……。まあ、真似するつもりは無かったのだけれど、土方に『舞踊』が嫌なら、『舞踏』で行け、と。」

—なるほど。ところで「舞踏」という言葉や響きを思うとき、歴史上では更に前、鹿鳴館時代の「舞踏会」という語もありますね。

「それまでのダンスやクラシックバレエは、パ・ソテ(跳ぶ)、ピルエット(旋回)等のテクニックが中心。その真逆を行く分野名ということで、『舞踏』という名称をつけた。『踏む』といってもドンと音を立てて踏みつけるのではなく、床を踏んで移動という表現の一端として、さらに『床を這う』ような意味合いからつけた名前。ですから鹿鳴館時代のような、社交ダンス的イメージを想起させるために使ったわけではないですよ。」

—従来のバレエの、上に向かう力へのアンチテーゼとしての意味があった訳ですか。実際この後、この名前（暗黒舞踏／舞踏）が土方さんの活動そのものになりました。ところで、「暗黒舞踏」という名前ですが、初期に「暗黒」の語をつけた理由や、イメージは？

「『暗黒舞踏』としたのは『舞踏』のままではそれこそ鹿鳴館時代の社交ダンスとしての『舞踏会』の名前やイメージを持ってしまう危険があるので。

暗黒舞踏、暗闇の漆黒の世界。明かるい世界じゃなくてね。暗闇の中で、床を這うようにして踊る表現。あとやはり、名前としてのインパクトが欲しかったのもあります。」

■命名2・・・土方「巽」の芸名を

—そうでしたか。ところで、先生の所にいた2年間で、土方さんに先生は何を教えられたのでしょうか？

「彼にはアバン・ギャルドの思想を教え込みました。アバン・ギャルドについて、素材としてどんなテーマがあるかときかれたので、私の本箱に置いといたジャン・ジュネとサルトル、日本では三島由紀夫のような作品を読んで、テーマをさがせというアドバイスを。彼はしばらくジュネと三島の『禁色』を読んでおり、その影響か土方ジュネと名乗っていました。

名前に関しては、当時、踊る時は『土方九日生』そしてジュネに影響を受けて『土方ジュネ』の名前だった。或る時ぼくに、本格的に芸名をつけてくれという話になった。そこで彼の好きな方位・方角を聞いたらそれが南東の方角だったので、『辰巳（たつみ）』＝『巽』の名前を与えました。」

—「巽」の名前は方角から来ていたのですね。土方さんは今井先生の所、現代舞台芸術協会での「埴輪の舞（1958年）」に初めて「土方巽」の名で出ました。これはアバン・ギャルド思想を身体表現として身につけられた土方巽さんの、「舞踏」表現や形式の實質上の第一歩だったのでしょうか？

「そう、『舞踏』という形式でのものでは、『埴輪の舞』がそうなるね。テーマは古代の埴輪。縄文以前の、古代。ああいうものを男と女をこう静かにスローモーションで動く表現を。足をこう踏みつけて、床にへばりつくように。クラシックの一番正反対、舞踏的な表現・動作のお手本のような作品。

これをぼくが全面的に構成して、彼に振り付け助手として、ぼくの指示で動かすようにした。この時はまだ『舞踏』というタイトルを付けていなかったけど、これが身体表現として、舞踏という様式を示した、事実上の最初の演目です。舞踏史における記念碑的作品になりました。」

■「舞踏」と音楽・・・「舞踏」様式最初の音楽とは

—「暗黒舞踏／舞踏」の音楽についてですが、既成のものを使うことが多いのでしょうか。それともオリジナルを作曲してもらう事が多いのでしょうか？

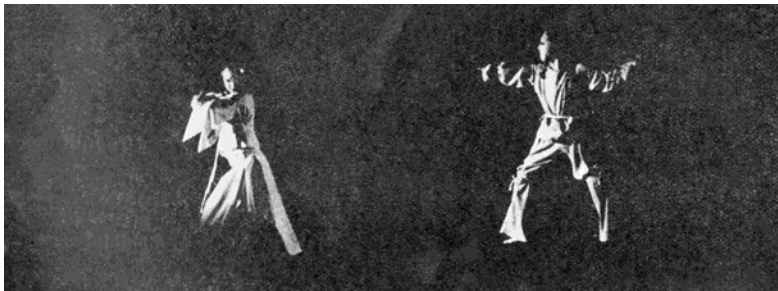
「まあ、作曲家にお願いするにはお金が大変ということで、当時はみんな勝手に、ありものの音楽を探してやっていたね。そう、音楽と云えば、独立して暗黒舞踏を始めた頃、黛（敏郎）さんを紹介してあげたこともあった。三島さんに会ってアドバイスを欲しがっていたので、ぼくの同門の黛さんから親交のあった三島さんを紹介してもらい繋がっていった。それで第一回公演、三島作品の『禁色』の時は、黛さんも三島さんも手を貸してバックアップしていた。」

—先のアバン・ギャルドの思想を教えていた時期、音楽について、自分の表現の中にどうやって取り込んで行けばいいかといったお話はされたのでしょうか？

「ぼくはもう、彼に関しては、純粋に踊りの方向性だけを教えていた。具体的な音楽については・・・最初の作品『埴輪の舞』では、ぼくの音楽で振り付けをした。彼を助手につけて、教えながら。その後は、やはり作曲を頼めるような状況では無かったのかな。色々既成の音楽を使ってやっていたようだね。」（「埴輪の舞」の音楽はCD「今井重幸回顧展コンサート」〔AKQ-0010 キングインターナショナル〕に収録）

—「埴輪の舞」の音楽はやはり、土方さん、そして生まれつつある舞踏らしさというものを模索しつつ作曲されたのですか？その時抱かれた「こういう方向で音楽を創ろう」というイメージは？

「ええ、もちろん。土方を使って、音楽を含めて舞踏的な表現方法を求めた第一作。その影響下でその後彼は自分の第一作を作って行った。そうだね・・・音楽は舞踏という世界に合う、じわーっと動くような音楽。ぼくのところを離れても、その音楽志向を彼はずっと守っていったようだよ。今も舞踏の中でその伝統があるんじゃないかな・・・。」



（左）「舞踏」発祥作ともいえるべき作品、『埴輪の舞（1958年）』初演の貴重な一枚。写真左：堤 世王己、写真右：堀口昌徳

（原案/作曲/振付：今井重幸
振付助手/群舞出演：土方巽
写真：「現代舞台藝術協會」
第一回公演プログラムより。）

■土方巽の旅立ち

—そんな土方さんも約2年後、今井先生のスタジオを旅立たれて。

「彼もまあ、ぼくの所にいつまでも居候できないから、出る機をうかがっていたようだね。ただ、2年近く居候してぼくのところを出てゆくときに、ジャン・ジュネの本とサルトルの本と、三島の全集、連作をごっそり全部持って行ってしまって。本箱がそこだけスポッと空いちゃった（笑）。彼はそれを持って、元藤燁子さんの所へ転がり込んで。さらに後に元藤さんと結婚して。」

——うーん (笑)。最後にまた豪快 (?) なことを。先生のスタジオを出てから元藤さんの所へ行かれた後、土方さんと先生の関わりはどうか続いていったのですか？時折お会いしたり、アドバイスをされたのでしょうか？

「元藤さんはその後、土方伝で多く出て来る有名な『アスベスト館』というのを建てたんですよ。もともと元藤さんのお父さんがアスベストを発明して。今でこそ人間に害があると云われるアスベストだけれど、当時は新しい建材だということでヒットしていた。

土方はぼくの所を出て、独自の、彼の世界を切り開いてさらに進んでいった。それから何度か会ったけど、『今こんなことをやっています』『今こんな事を考えていますけどどうですか？』という報告や相談はあって、その都度アドバイスをしたけどね。でもぼく自身がそこに行って直接指導する事はなかった。ぼくの所で、踊りの考え方、生き方をすでに指導していたし、そこから先はもう、彼自身の才能に託していたからね。」

——そうでしたか。しかし土方さんの現役は短く、1986年、とても早く「舞台」から去ってしまって……。

「そう。土方は走り続けたまま……若くして死んでしまったんだよね……。なんであるに早く……。もっとやれる事がいっぱいあったと思うと、残念で仕方がない。」

1985年12月、土方は肝臓癌におかされ、医師より余命一ヶ月と家族に告げられた。最後の正月を家族と過ごし、翌1986年1月22日、その日が訪れた。東京女子医大付属病院の病室から、あかるい設備の整った部屋、最期の時を迎えるべき死の部屋に移っていた土方は、家族と多くの友人に看取られながら死去。享年57歳。

最後に、土方巽の最期を看取った、妻の元藤燐子さんの著書『土方巽とともに』から一文を引用して、この章を終えたい。

『(前略)土方はだんだん意識をなくしていった。いま、彼はとうとう神の光さす長い階段を上り、その先の光の国へと旅立ってしまった。一步一步、静かに優しく——。土方は呆然とたたずむ人たちの前で、王者のように誇らしく、まばゆいばかりに輝かしく、凄絶なまでに美しく、私には耳慣れた、あの、こつこつという靴音を響かせながら、一步一步去っていった。私は土方に最後の水を含ませ、皆の待っている廊下に出た。「午後10時21分、土方巽は舞踏神となって飛翔してゆきました。永い間ありがとうございました」私はこれだけ言うのがやっとで、がっくりと膝をついた。』



(左) 元藤燐子著『土方巽とともに』

(1990年 筑摩書房)

(右) 稲田奈緒美著『土方巽 絶後の身体』

(2008年 日本放送出版協会)

(於：2012年1月19日/1月23日 今井重幸邸にて)

※一部、前号予告の内容が変更になりました。



現代音楽見聞記 (13) 2012年1月

音楽評論 西 耕一

作曲家の訃報が続く。4日高橋東悟、5日林光、8日玉木宏樹、12日別宮貞雄。時代の変わり目なのだろうか。3・11から我々はどれだけの別れを経験するのか…。高橋東悟は50歳。作曲以外にも、現代音楽のコンクールをwebsiteでまとめ後進が世に出るのを助けた。突然の心筋梗塞で逝った。林光は80歳。昨年9月転倒して意識不明と聞いていたが、そのまま帰らぬ人となった。倒れる一月前、8月9日に東混で《原爆小景》を指揮する矍鑠とした姿が印象深い。お別れ会は3月30日。玉木宏樹は68歳。昨年10月30日の箏協奏曲が遺作。劇伴やヴァイオリン演奏がよく知られたが、後半生は日本楽器へ集中して良作を発表した。死後、Twitterで「あの世からつぶやいています」と書き込みをした。別宮貞雄は89歳。脳腫瘍で失明する中で書いたオペラ《井筒の女》(2007)が遺作。公には2008年末に自作演奏会へ出席したのが最後だろう。晩年、「自分の仕事の整理を続け、《井筒の女》で最後とするつもり。実はマイクロポリフォニーを使った交響曲第6番を書くためにパソコンを買ってあるが、目が見えないので書くことはないだろう」と話された思い出が甦る。

今年最初は、**5日**藤井一興リサイタルにおける湯浅譲二の内触覚的宇宙IIから。**10日**エクセルシオSQが大澤壽人(1906-53)の弦楽四重奏曲(1933/初演)という期待の演目が慶應日吉キャンパスで無料であったが、行けず。**12日**東京フィルは外山雄三指揮で自作vn協奏曲第2番。独奏は松山冨花。同じく**13日**はチェロ協奏曲を独奏宮田大。指揮者としての経験が活かした効果的管弦楽法と民謡のマッチングは流石。現代音楽より古典の範疇とし形容できよう。**17日**は重なったがりハーサルと本番を分けた。まずコンポーザム「サルヴァトーレ・シャリーノを迎えて」でマルコ・アンジュス管指揮、東フィルによるカウンターテナー、フルート四重奏、サクソフォン四重奏、パーカッション、100本のフルート、100本のサクソフォンによる曲他。異常な編成が集まるという野次馬興味が内容を上回る曲であるのは確か。あまりの誇大妄想編成へ真摯な対応をする面白さはある。深読みすれば非常にエロティックな音楽としても聴けるのだが…。引き続き都響「日本管弦楽の名曲とその源流13プロデュース一柳慧」高関健指揮で北爪道夫とリゲティ。岡田博美独奏のリゲティpf協奏曲が白眉。また、この時期はシド音楽企画熊谷弘による恒例の「日本の音楽展」も日本の曲だけで1週間の長期公演をする。意義ある継続。**18日**デュピイ1975日原史絵(箏・三味線)+山本和智(作曲)がワンダーサイト渋谷で会場の構造も逆手にとった芸術的演出のコンサート。だんだんと箏が日本列島に見えてくる程にイメージの深いレベルで日本と取り組む。**19日**はJFC「日本の作曲家」は40歳以下の回。川島素晴のチェロを糸で宙吊りにしたSMチックな曲に驚く。**20日**は武満賞であったが、筆者は広島へ。細川俊夫のオペラ《班女》の平田オリザ新演出。川瀬賢太郎指揮、広響。能の世界観が深層から作用してジワジワと心に浸透する音楽。同時期に筆者は行けなかったが日本オペラ協会の池辺晋一郎歌劇「高野聖」(委嘱初演)もあった。**21日**、**22日**は日本現代音楽協会創立80周年記念全5公演+1。昼から夜までを2日間であったので流石に疲れた。中川俊郎のピアノ演奏で初演された現音会員80人の曲からワンアタックを引用して作曲した松平頼暁のピアノ曲は企画の勝利と言える。**24日**都響一柳プロデュース2日目。野平一郎とブーレーズ。野平を自身が指揮、ブーレーズを杉山洋一が指揮。ブーレーズの鋭さよりも野平の包容力に興味を持った。**27日**JFC須川展也プロデュースはsaxを存分に味わう。川崎絵都夫曲が民謡で音色を見事活かした。**29日**第五回牧野由多可作曲コンクールは大賞なし。

(にし・こういち 賛助会員)

「動き、舞踊、所作と音楽」

日時:2012年3月12日(月) 開演/18時30分

場所:すみだトリフォニーホール(小ホール)

主催:日本音楽舞踊会議

後援:月刊『音楽の世界』

公演プロデューサー:高橋通/高島和義

【プログラム】

1. 浅香 満 ODDECH I ŻYCIE ～序章 (原語は「0」の上に「・」をつける)
酒井麻也子(振付) 杉山智之(読経・浄土真宗間乗寺副住職)
(パフォーマー(五十音順)):井嶋理恵子/内垣絢子/神田麻衣/曾山美穂/曾山ゆき/
武田麻衣/鳥居久美子/福田葉亜都/元田絢子/森岡真弥
2. 橘川 琢 叙情組曲《日本の小径》補遺より「春告花・三景」op.54
上野雄次(花道家)/戸塚ふみ代(ヴァイオリン)/
森川あづさ(ピアノ)/木部与巴仁(詩唱)

—— 休憩 ——

3. 高橋雅光 独奏尺八の為の - 悲 - 坂田誠山(尺八)/清水フミヒト(舞踊)
4. 小西徹郎 "Talk to me" for Trumpet solo 小西徹郎(トランペット)
5. 高橋 通 春雪夢浮橋 高橋 通(一絃琴)/天野美和子(舞踊)
6. 清道洋一 革命幻想歌
(配役)後鳥羽上皇-木部与巴仁 OLもしくは麗子の君-堀江麗奈
楽師英成-萩野谷英成 美術家-清道洋一
7. 助川敏弥 独奏十七弦による三章 池上亜佐佳(十七弦)/花崎さみ八(舞踊)

※ 事前チラシご案内と、演奏順が変わりました。あらかじめご了承ください。

1. 浅香 満 ODDECH I ŻYCIE ～序章

～作品について

これまで度々訪れたワルシャワ旧市街、ゲッターを始めとする人々の心の傷跡の記憶と、今年のちょうど今頃の思いを重ねて構成いたしました。多くの皆様のご協力に支えられて実現できることを心から感謝しております。なお、タイトルはポーランド語で「呼吸と生命」という意味です。



浅香 満

早稲田大学文学部中退。東京藝術大学作曲科卒業。同大学大学院修了。
現在、早稲田大学専任教員として高等学院音楽科の指導、及び教育学部教育学科兼担。



杉山智之

龍谷大学文学部真宗学科卒業。浄土真宗本願寺派 雲龍山 聞乗寺 副住職
浄土真宗本願寺派 雲龍山 聞乗寺（富山県氷見市）代務住職

酒井麻也子

ニューヨーク留学中、アルビン・エイリー舞踊団の依頼でエイズ撲滅キャンペーンのイベント、ミュージックビデオにダンサーとして出演。帰国後、ジャニーズV6、今井翼、藤原歌劇団、ミュージカル忍たま乱太郎、歌手の個人レッスンなど幅広い分野で振付・演出・指導を手掛ける。昭和音楽大学講師。



井嶋理恵子

昭和音楽芸術学院 ミュージカル科卒業。舞台、イベントダンサー他、子供ミュージカルダンス振付指導等で活躍中



内垣絢子

国立音楽大学卒アンサンブル・ピアノ・コース修了。フリーランスのアンサンブルピアニストとして現在活躍中。



神田麻衣

国立音楽大学音楽学部器楽学科(ピアノ)卒業。奈良場恒美氏に師事。クラシックやシャンソンのジャンルで活動中。



曾山美穂

国立音楽大学器楽学科打楽器卒業。現在、ヤマハ音楽教室システム講師兼打楽器講師。



曾山侑紀

高校時代、舞台芸術科にてダンスと演技を学ぶ。現在、東京音楽大学声楽専攻4年。



武田麻衣

桐朋学園大学音楽学部演奏学科声楽専攻卒業後、同大学研究科修了。洗足学園音楽大学大学院声楽専攻修了。声楽を、伊藤叔、藤川泰彰、秋山理恵の各氏に師事。



鳥居久美子

名古屋東邦学園短期大学秘書科卒業 OCEAN50所属
素敵な出会いに感謝。Dance For Life!



福田葉亜都

国立音楽大学を首席で卒業。卒業時に武岡賞を受賞。同大学卒業演奏会に出演。



元田絢子

国立音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。現在、立教大学大学院ビジネスデザイン研究科に在籍。チャリティーコンサートなどを中心としたアートマネジメント活動を展開している。



森岡真弥

昭和音楽芸術学院ミュージカル科卒業
ダンスの舞台出演ほか小学校コンクールの振付などでも活動中。

2. 橘川 琢 叙情組曲《日本の小径》補遺より「春告花・三景」op.54

一人旅。日本の、名も知らぬ小径を歩き続けて。逗留先で心を寄せた風景、五感で感じる季節の光。今年も見かける、変わらぬ花。日本に春を告げる花々は、我々に、巡る命溢れる季節を、癒えぬ悲しみの中、それでも再び咲く希望を信じる事を思い出させてくれる。

『淡墨桜（うすずみざくら）』Allegretto 尺八ピアノ二重奏曲「春秋花様」より。幼少の頃観た、光と風に幽かに輝き揺れる淡墨桜の美しさよ。幾度春が巡ってきても消える事なく心に咲いている。『春夜風』Lento 春の夜の散策。時折激しい風が吹き荒れ花に吹きつけ、恐ろしいうなり声をあげる。『蓮華乙女』Andantino 子どもの頃、川の土手や田畑で遊び、手に取っていた大好きな蓮華草。春の日差しと風にくるまれ、感じるぬくもり、思い出。出演は、作曲者とともに十数作共作し、音楽に描かれた心を細やかに感じ取って表現して下さる皆様。詩は、『春告花』（詩：櫻木暁雪）。演奏時間、約12分。「花」と「言葉」と「音楽」の、ささやかなひとときをお楽しみ頂ければ幸いです。



橘川 琢 KITSUKAWA Migaku (作曲)

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。第2回牧野由多可賞作曲コンクールファイナリスト。2006年「文化庁芸術祭」参加。2006年・2008年度文化庁「本物の舞台 芸術体験事業」に、自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択。『新感覚抒情派(『音楽現代』誌)』と評される現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。日本音楽舞踊会議理事、月刊「音楽の世界」副編集長、文部科学省音楽療法専門士、日本音楽療法学会認定音楽療法士(補)ほか。詳細は<http://migaku-k.net>



上野雄次 UENO Yuji (花)

1988年、勅使河原宏の前衛的ないけばな作品に出会い、華道を学び始める。国内展覧会での作品発表の他、バリ島、火災跡地など野外での創作活動、イベントの美術なども手がける。2005年より、“はないけ”のライブ・パフォーマンスをギャラリーマキで開始。地脈を読み取りモノと花材を選び抜き、いけることの独自の生きる世界を展開し続けている。創造と破壊を繰り返すその予測不可能な展開は、各分野から熱烈な支持を得ている。



戸塚ふみ代 TOTSUKA Fummy (ヴァイオリン)

小さい頃、兄のお古のヴァイオリンが回ってきた。仲良しの友の影響で音大へ。留学してドイツ語に苦戦、指揮の高関健氏が同期で、よく宿題をしてもらった。プロオケに入り、マーラーに衝撃を受ける。コンマスとSQを組んでラ・フォルジュネに出演し、完売のプラカードを見て緊張。サロンコンサートでは120人分ロールケーキを作った事もあり、12月にはソイキャンドルを。この文が縁で皆さんとお話できたら嬉しい私です。



森川あづさ MORIKAWA Azusa (ピアノ)

都立芸術高校を経て、東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。橘川 琢の作品ほか、数多くの現代作品の初演を手掛ける。現在、フジロック(仮)やMAHOQなど複数のバンドで活動中。これまでに真継豊子、多 美智子、植田克己、松本 明、川上昌裕の各氏（敬称略）に師事。



木部与巴仁 KIBE Yohani (詩唱)

詩唱者。詩と音楽を歌い、奏でる「トロッタの会」などを通じ、作曲家、演奏家と共同作業を行う。詩唱とは、朗読と歌を合わせた音楽としての発声。それは音楽作品として作曲される。第15回「トロッタの会」は5月13日（月）、早稲田奉仕園スコットホールで開催予定。伊福部昭、今井重幸、橘川琢、清道洋一、酒井健吉、田中修 一、田中隆司、宮崎文香諸氏の曲に加え、ガルシア・ロルカの作品を予定

し

ている。 www.kibegraphy.com

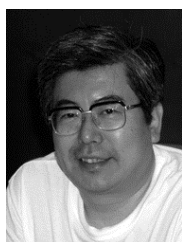
3. 高橋雅光 独奏尺八の為の - 悲 -

この作品は、1973年に鑑賞団体である「労音」と、演奏団体である「日本音楽集団」と、創作団体である本会の三団体が、がっぷり四つに組んでコンサートを開くということで、本会作曲部会に和楽器作品の公募が有り、審査も演奏公開審査で入選し、翌年6月に日経ホールで初演された作品です。

私は、この作品の直前に「木管五重奏曲」を書き、「八木重吉詩による歌曲集」と共に、あっちこっちで演奏してもらっていましたが、本格的なデビューはこの作品からでとても懐かしい作品です。

1979年には、元本会会員の山形真紀子氏（モダンダンサー）によって、青山円形劇場で本人の振り付けにより踊って頂いた経緯が有り、今回こういう機会があり竹師坂田誠山師の演奏と共にとても楽しみです。

作品の内容は、当時ベトナム戦争等が有り、人は生きていくためにはどれだけの悲しい現実を背負わなければならないのかと言う事を、中間部の即興的な“ピエロ的な悲しみ”を挟み表した作品です。



高橋雅光

作曲を安達元彦氏、岡田京子氏に師事。管弦楽法をモスクワ音楽院主任教授のカレン ハチャトゥリャン氏に習う。1977年第二回日本音楽集団作曲公募第一位入賞。1977年度作曲賞を受賞。’84年5月第二回モスクワ国際現代音楽祭に故芥川也寸志氏、故寺原伸夫氏と共にソヴィエト文化省の招待参加。’94年東京尺八合奏団より3年連続尺八・箏・十七絃の大合奏曲の依頼を受ける。日本現代音楽

協会会員、日本作曲家協議会会員、本会理事・出版局長・楽譜出版部長。



清水フミヒト

一瞬にして舞台の空気を変える存在感、足の先から指の先まで全てを使い表すその表現力は高く評価され、ジャンルを超えた様々な舞台でゲストソロダンサーとして活躍。2009年新進芸術家海外研修員としてニューヨークで活動。第33回埼玉全国舞踊コンクール第一位・橘秋子賞・埼玉県知事賞・社団法人現代舞踊協会賞・第58回東京新聞主催全国舞踊コンクール第1位・文部科学大臣賞 東京都知事賞 平岡斗南夫賞 北海道教育大学函館校モダンダンスクラブコーチ 岡山市スポーツ・文化振興財団主催ダンスインキュベーションフィールド岡山講師



坂田誠山

尺八界の一方の雄。世界民族音楽コンクール受賞以来35年にわたり国際的に活動。その迫力ある演奏と同時に、邦楽合奏の指揮など楽界での信望も厚い。ヨーヨー・マなどのソリストとの共演も多く、クルトマズア指揮での三木稔作曲《急の曲》《大地の記憶》、セントルイスオペラ劇場のオペラ《じょうりり》各世界初演、サボンリンナオペラ祭《春琴抄》などで尺八ソリストとして参加。98年『オーラJ』を結成、代表を務める。またドルチェ邦楽合奏団グループ（現在、千葉邦楽合奏団、東京邦楽合奏団、神奈川邦楽合奏団が活動中）を結成、アマチュア邦楽合奏団運動にも貢献中。昨年、日本尺八連盟の会長に鳩山邦夫氏の後任。邦楽界だけに止まらず多岐に亘って尺八演奏活動を展開している。

4. 小西徹郎 “Talk to me” for Trumpet solo

作品解説

トランペットの音を楽しんでいただけたら、また会場に流れている音の空気を感じていただけたらとてもうれしく思います。よろしく願いいたします。



小西徹郎

カナダNY韓国など国内外で舞踊のための音楽を制作。各公演はカナダのトロントスター紙 The Globe and Mail 紙、韓国の Dance forum 誌など新聞雑誌メディアで評価を得た。音楽以外では KENZO の香水 FLOWER BY KENZO と花岡陽子フラメンコ公演 Pasa la vida～時は過ぎゆく～平成22年度文化庁芸術祭参加公演とのコーディネートを行った。演出は清水フミヒト氏。

5. 高橋 通 春雪夢浮橋

春雪夢浮橋（はるのゆき ゆめのうきはし）

一絃琴による唄浄瑠璃～芝居歌～です。実際にあった心中事件を基に近松門左衛門による浄瑠璃が作られましたが、その後<太平記忠臣蔵講釈>の余興の場面で使われた心中道行きものです。傾城浮橋と塩谷判官の弟石堂縫之助の祇園から鳥辺山への心中道行きを情緒たっぷりにうたったものです。現代舞踊でどのように踊ってくれるのか、楽しみです。



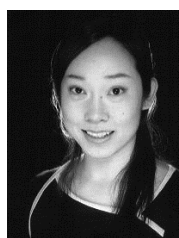
高橋 通(Toru Takahashi)

1947年、神奈川県小田原市に生まれる。現在埼玉県飯能市在住。

神奈川県立平塚江南高等学校を経て、日本医科大学、同大学院入学終了。医学博士。

ピアノを故川村蔦子師に、作曲を田辺恒弥師に師事した。一絃琴の手ほどきを琴者故山本游魚師に受けた。伝統的な一絃琴音楽の作品から現代音楽まで、広い範囲にわたる作曲作品がある。幽意一絃琴「鳴琴会」主宰。（社）日本歌曲振興会会員（作曲）。

日本音楽舞踊会議（CMDJ）会員（作曲）。



天野美和子

井上恵美子ダンスカンパニー所属。（社）現代舞踊協会会員。日本大学芸術学部卒業。

カンパニー公演をはじめ、現代舞踊協会、文化庁主催公演などでも幅広く活躍。自作の発表にも力を注いでいる。2006年 文化庁新進芸術家国内研修員。2008年 文化庁新進芸術家在外研修員（オランダ・1年）

6. 清道洋一 革命幻想歌

【作品解説】

「動き、舞踊、所作と音楽」を考えた場合、バレエやオペラ、ミュージカルを一つの到達点とする『形』を思い浮かべることができましょう。こういった異なる表現形態が融合された表現について、作曲家の関わり方に大きな興味があります。

ヴァグナーのように台本を書き、自分の楽劇を上演するためのホールも造るといった場合、「作曲するという行為」はどこまでなのか。

台本も、コンサートホールも、作曲家が創った以上、それは『音楽』ではないか。

本作品も一見、別の表現形態のようにみえるでしょうが、作曲の立場から言葉や動き、美術を制御した以上、やはり『音楽』であるといえましょう。

（配役）後鳥羽上皇－木部与巴仁 OLもしくは麗子の君－堀江麗奈
楽師英成－萩野谷英成 美術家－清道洋一



清道洋一

1966年長野市出身。

作曲家グループ「蒼」、詩を歌い、奏でるトロッタの会、社団法人日本作曲家協議会 会員。劇団「萬國四季協會」では1995年から2010年の間に、40本近くの演劇、バレエ、パフォーマンスに作曲をして、一部は、海外でも高く評価された。

本年、4月2日から4月7日、京橋のK'sギャラリーにて美術家KURO個展の音楽監修。

4月2日には、本個展のために作曲した「いのりのうた」と、「いのりうた」の初演にあたる尺八五重奏団『すず音』のために作曲した「風の狂詩曲」の再演を含む、オープニングコンサートが開催予定。また、以下の演奏会で新作初演が行われる予定。

5月13日 「霧に歌っていた」（詩・木部与巴仁）トロッタ15、早稲田奉仕園

7月21日 「風のファンタジア」

NHK邦楽技能者育成会54期卒業生による『花鳥の会』すみだトリフォニー

11月30日 ギター協奏曲『ジェミニ』（ギター萩野谷英成）

作曲家グループ蒼第30回記念演奏会 旧東京音楽学校奏楽堂



木部与巴仁

2. 橘川 琢作品の項を参照。



萩野谷英成

ギターを小林 徹氏に師事、P. シュタイドル氏、Y. セルシェル氏、福田進一氏等のレッスンを受講。埼玉ギターコンクール優勝や日本ギター重奏コンクール優勝する等、コンクール・オーディションにて首席受賞歴多数。ギターデュオやカルテット等を中心にジャンルを問わず広く演奏活動を行う。高田馬場にてギター教室主宰。日本ギター合奏連盟常任理事。



堀江麗奈

千葉県松戸市出身。10年間の劇団生活を経て、昨年よりフリーの女優として活動中。

（プロフィール写真：窪寺雄二）

7. 助川敏弥 独奏十七絃による三章

独奏十七絃による三章

この曲は、1974年、札幌の十七絃奏者、佐藤のり子さんのリサイタルのために作曲、札幌のリサイタルで初演された。その後、池上亜佐子さんを含む何人もの奏者によって再演されてきた。2009年には、モダン・ダンスの芙二三枝子さんにより、現代舞踊として上演された。この時の演奏者は菊地梯子さんであった。今回は若手のすぐれた演奏者である池上さんと、意欲的な舞踊家、花崎さみ八さんの地唄舞により、再び舞踊として上演される。

曲は三つの章からなり、江戸時代の日本画家、円山応挙の絵画から借題した。「雪松」、「雨竹」、「飛雁」の三章からなり、曲想は、遅いものから次第に動きをともなうものへ、静から動への布石で出来ている。前二章では、西洋音楽の記譜リズムによらず、時間を自由に呼吸する記譜法によっている。第三曲では、一貫した動きのリズムで洋楽的名技性の展開となる。動的な構造が舞踊家の意欲の対象になることが期待される。今回は演奏と舞踊、若手のすぐれた出演者に成果を期待する。(作曲家)



助川敏弥

1930年生。東京芸術大学作曲科卒業。芸大在学中に日本音楽コンクール第一位と特賞受賞、1960年度文部省芸術祭奨励賞、1971年度文化庁芸術祭優秀賞、1973年度イタリア放送協会主催国際放送作品コンクール「イタリア賞」(NHK参加)大賞。1976年から1994年まで日本現代音楽協会委員。日本音楽舞踊会議機関誌月刊「音楽の世界」前編集長、2008年より日本音楽舞踊会議代表理事。



池上亜佐佳

幼少より両親に箏のてほどきを受ける。後に内田克子師に師事

1996年 東海大学教養学部芸術学科音楽学課程卒業 第66回読売新聞社主催新人演奏会出演 1997年 NHK邦楽オーディション合格 東海大学教養学部音楽科研修生修了 NHK邦楽技能者育成会42期修了 2000年 中国大連に演奏旅行 2009年 「池上亜佐佳17絃リサイタル」開催 菊地梯子師に師事 宮城社師範 KO・T0

2・KAI、コトウタ メンバー 江戸信吾作品集 池上眞吾作品集 和楽器とうたう「日本の童謡・抒情歌」などCD録音多数



花崎さみ八

広島県出身。東京大学教養学部卒。ベリーダンサー (saamiya)、花崎流地唄舞名取、合気道二段。2009年パレスチナにて地唄舞演舞、2010年世界舞踊祭にベリーダンスで出演、2011年台湾にてベリーダンス公演。毎年神社にて巫女舞を奉納。時々、フルマラソンを走り、トルコの弦楽器サズを弾く。

※名前等の表記、曲解説は、各作曲家による。

日本音楽舞踊会議 楽譜出版部からのお知らせ

楽譜出版部が出来て新しい出版を始めています。それに伴い、既に出版済の楽譜の在庫確認、価格改正を致しましたのでご報告します。(楽譜出版部長 高橋雅光)

日本音楽舞踊会議 発行中の楽譜

助川敏弥：KOMORIUTA 作品73 (1986年)

(東北地方に伝わる子守唄を主題としたピアノ曲) A4版9頁 1,260円

ピアノ曲集「ひえつきぶし」(2002年)(東北民謡を主題とした作品)

Lacrimosa「ちいさき たましいの ために」

四手連弾「風の遊び」

A4版19頁 1,680円

歌曲集「白く光れり」向山房枝詩(1996年)

(「ゆうやみ」「ゆらゆらと」「すずしさを」「ひさびさに」「つけしみに」)

A4版17頁 2,100円

歌曲集「ガラスの花束」立原えりか詩(1976年)

(「陽春」「光りの矢」「ムラサキイロの少年」「親指姫」「秋のままごと」)

A4版25頁 2,940円

歌曲集「夕顔」金子みすず詩(1999年)

(「夕顔」「土の草」「みそはぎ」「草原の夜」「だれがほんとを」)

A4版13頁 1,680円

高橋雅光：どんぐりっこのメロディー

宮田滋子詩による「おかあさんといっしょにうたう、あたらしい童謡曲集」

B5版27頁 2,100円

中島克磨：「モスクワ」ピアノのための詩曲 Poema"Moskva" for piano

A4版8頁 1,575円

木幡由美子：「トッカータ」ピアノのために "TOCCATA" for piano

A4版8頁 1,260円

北条直彦：「ピアノのためのヴィジョン」Vision for piano

A4版7頁 1,260円

黒髪芳光：「こどもの祭りⅡ」ピアノのための四手連弾曲集

(バイエル・メトードローズ併用)

A4版20頁 2,100円

小平時之助：歌曲集「北の国から」(「木地山ぼっこ」「ほしがき」他5曲)

A4版14頁 1,890円

金籐 豊：「ピアノのためのトッカータ」Toccat—interactive for piano

A4版16頁 1,890円

西山淑子：「金子みすずの詩による童謡集」

A4版51頁 3,150円

*お求めは日本音楽舞踊会議まで、郵便振替用紙にご注文の曲名をお書きの上ご送金ください。

日本音楽舞踊会議出版局

会と会員の情報

1. 平成24年2月11日新宿文化センター第五会議室で日本音楽舞踊会議定期総会が開かれ、本年度の役員役職が決定しました。

本年度の役員役職を紹介します。

役員

理事：浦 富美 ・ 北川 暁子 ・ 北川 靖子 ・ 橘川 琢 ・ 栗栖麻衣子
・ 小西 徹郎 ・ 助川 敏弥 ・ 高島 和義 ・ 高橋 通 ・ 高橋 雅光
・ 戸引小夜子 ・ 中島 洋一 ・ 並木 桂子 ・ 広瀬美紀子 ・ 深沢 亮子
・ 北條 直彦
監事：新井 知子 ・ 西山 淑子

役職

○代表権を持つ役職

代表理事：助川 敏弥
深沢 亮子

理事長：戸引小夜子

副理事長：北川 暁子

○業務役職

【管理部門】

[事務局] 事務局長： 高島和義

事務局次長：浦 富美・栗栖麻衣子

事務局相談役：新井知子・戸引小夜子・橘川 琢（全員・執務兼任）

[財務局] 財務局長： 橘川 琢

財務局次長：高島和義

【事業部門】

[出版局] 出版局長： 高橋雅光

《機関誌出版部・機関誌編集部》

機関誌出版部長：橘川 琢

機関誌編集長： 中島洋一

機関誌編集スタッフ：新井知子・浦 富美・大久保靖子・橘川 琢

・栗栖麻衣子・高島和義・高橋 通・高橋雅光・戸引小夜子

・北條直彦

《電子出版部》

電子出版部長：高橋 通

web 編集長：小西徹郎

メールマガジン編集長：中島洋一

[公演局] 公演局長：北條直彦

《公演企画部》公演企画部長：中島洋一

《部会》

〈作曲部会〉 部会長：高橋 通（新任）

副部会長：橘川 琢、中嶋恒雄（新任）

会計：橘川琢 渉外：北條直彦

相談役：中島洋一、西山淑子（新任）

〈ピアノ部会〉 部会長：太田恵美子（新任）

副部会長：戸引小夜子、栗栖麻衣子 会計：田中俊子

企画相談役：深沢亮子、北川暁子

〈声楽部会〉 部会長：浦 富美

副部会長（会計兼務）：内田暁子

相談役：佐藤光政（新任）、芝田貞子（新任）

〈弦楽部会〉 部会長：安田謙一郎

2. CMD J 会と会員のスケジュール

2012年

3月

3日(土) 廣瀬史佳（ピアノ・青年会員）－「チェロ」らしさとは何か

出演：荒唐子（チェリスト）真嶋雄大（音楽評論家）曲：ポッパー「ハンガリア狂詩曲」他【新宿住友ビル7階 13:00-14:30 一般4,620円】

4日(日) ピアノ部会 第一回試演会【10:00~12:00 新井宅（西荻窪）】

9日(金) 深沢亮子－室内楽コンサート

シューベルト：まず モーツァルト：ピアノ弦楽四重奏曲第1番

【久米美術館 18:00 主催・問合せ：日唄協会 03-3468-1244（水・木・金 13~16時）】

12日(月) 『動き・舞踊・所作と音楽』コンサート

【すみだトリフォニー小ホール 18:30開演 一般3,500円】

（本号掲載プログラムに詳報）

16日(金)～東京藝術大学音楽学部北川暁子退任記念コンサート～

ベートーヴェンピアノソナタ全曲連続演奏会第4夜 第10番 第22番 第29番

【東京藝術大学奏楽堂（大学構内）午後7時開演 入場無料 事前応募制

お問合せ：東京藝術大学演奏芸術センター 050-5525-2300】

17日(土) 福島原発被害者支援チャリティーコンサート

出演：広瀬美紀子／共演：神崎 愛他

演奏曲：ピアソラ作曲／北條直彦編曲 アディオスノニーノ 他

【オリンパスホール八王子（大ホール）14:00～ 2,000円】

18日(水) CDを聴く会 ～ハンス・ロットを聴く～【会事務所 14:00より】

20日(金) 北川暁子ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会

第5夜 第2番 第20番 第15番 第16番 第30番

【津田ホール 19:00 一般5,000円、学生3,000円】

問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

5 月

10日(木) 作曲部会公演 作曲部会作品展

【すみだトリフォニー小ホール 18:30開演 入場料 3,000円】

プログラム

1 大和 実 Minoru YAMATO

大和ミエ子詩謡集「さくら さくら」より(詩:大和ミエ子)

1、「こぶしの花」 2、「冬の鳥」 3、「榛名賛歌」

2 高橋 通 Toru TAKAHASHI ピアノ ソナタ (初演)

3 津田裕子 Hiroko TSUDA 「ヘスペリデスの庭」 (初演)

4 桑原洋明 Hiroaki KUWAHARA ピアノ三重奏曲『ある内なる対話』(初演)

5 金藤 豊 Yutaka KANETO ヴァイオリンソナタ第5番 (改訂初演)

6 島筒英夫 Hideo SHIMAZUTSU「防人の歌」(作詩:高橋一仁) (初演)

第一首 おそろしや 第二首 ふるさとよ 第三首 いきのしま

第四首 ねんきおえ 第五首 としおいた 第六首 いつのよか

7 穴原雅己 Masami ANAHARA 弦楽四重奏のためのレクイエム (初演)

8 ロクリアン正岡 Locrian MASAOKA

「ライオンへの畏敬」-サクソフォンによる(初演)

サクソフォン八重奏曲「来音ライオン」(初演)

18日(金) 北川暁子ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会

第6夜 第5番 第9番 第14番 第18番 第26番

【津田ホール 19:00 一般 5,000円、学生 3,000円 問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

6 月

12日(火) 深沢亮子 朝日カルチャーセンター 共演:Vn. 中村静香さんと

モーツァルト:ピアノとヴァイオリンの為のソナタ K.454、ブラームス:

ヴァイオリンとピアノの為のソナタ No.1【朝日カルチャーセンター13:00

問い合わせ:朝日カルチャーセンター 03-3344-1945】

15日(金) 北川暁子ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会

第7夜 第6番 第11番 第12番 第24番 第32番

【津田ホール 19:00 一般 5,000円、学生 3,000円

問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

25日(月) 深沢亮子 翔の会 公開レッスン

【トモノホール 10:00 問い合わせ:大山喬子 044-966-5224】

7 月

7日(土) 声楽部会コンサート 「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」

【すみだトリフォニー小ホール14:00 2,500円 詳細未定】

13日(金) ピアノ部会コンサート

【東京オペラシティリサイタルホール19:00開演 詳細未定】

14日(土) 深沢亮子 日生劇場ピロティコンサート 共演:永井公美子 他

【14:00 日生劇場 問合せ Fax:F. シューベルトソサエティー03-5805-6318】

29日(日) 深沢亮子ー 栗栖麻衣子さんとの連弾とソロ【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール 15:00 開演予定 問い合わせ: 武田 080-3310-4238】

9 月

8日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル 共演: ウィーン弦楽トリオ
モーツァルト: ケーゲルシュタットトリオ, シューベルト: ます 他
【浜離宮朝日ホール 14:00】

21日(金) CMDJ オペラコンサート 2012 【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】

23日(日) 深沢亮子ー 千葉音楽コンクール本選審査【問い合わせ: 千葉音楽コンクール事務局 043-227-0055】

29日(土) 深沢亮子 東邦大学佐倉看護専門学校創立20周年記念祝賀会
【オークラ千葉ホテル 11:00 (予定)】

10 月

7日(日) 広瀬美紀子ピアノリサイタル ベートーヴェンピアノソナタ第17番
「テンペスト」・ピアソラ(北條直彦編曲)「孤独」他
【王子ホール(銀座) 14:00 開演 3,500円】

15日(月) 「様々な音の風景Ⅹ」～20世紀以降の音楽とその潮流～
【すみだトリフォニー小ホール】 詳細未定

11 月

18日(日) 若い翼によるCMDJコンサート5【すみだトリフォニー小ホール】
(詳細未定)

12 月

4日(火) 深沢亮子とその仲間による “ピアノと室内楽の夕べ”
【音楽の友ホール・詳細未定】

15日(土) 室内楽コンサート シューマン、ドビュッシー ピアノ5重奏曲
Pf. 深沢亮子 Vn. 掛橋佑水、井上静香 Va. 中村静香 Vc. 宮坂拓志
主催(財) 藤沢市芸術文化振興財団【湘南台文化センター市民シアター
16:00 (予定) 問い合わせ: 0466-28-1135】

2013年

1 月

25日(金) 声楽部会主催公演【すみだトリフォニー小ホール・詳細未定】

27日(日) 深沢亮子ー 東金文化会館創立25周年記念コンサート ソロと室内楽
共演: Va. 中村静香、Vc. 上村文乃【問い合わせ: 東金文化会館 0475-55-6211】

会員・賛助会員の皆様へ「スケジュール」へのお知らせとお願い

- 上記スケジュール記載の本会主催事業(ゴシック文字)には、会員・賛助会員・CMDJ友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。
- 毎号掲載されるこの欄に皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたはFaxでお知らせ下さい。
- お知らせの際は、①〇月〇日(曜日) ②会員名 ③催し物(出版物)名④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容の一つ ⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。

編集後記

今月の11日には、東日本大震災から一周年を迎えます。本会会員で原発被災者のためのチャリティーコンサートを開催する人もおりますので、会員、読者のみなさまの支援をお願いしたいと思います。また、今月は『動き・舞踊・所作と音楽』、『エレクトーン・オケによるコンチェルトと歌曲の調べ』という2つのユニークなコンサートが開催されます。前者は舞踊、しぐさ、朗読など、他のジャンルの芸術と音楽のコラボレーション、後者は電子楽器と古典楽器、声楽とのコラボレーションです。興味深い催となるのが期待されますので、多数の方々のご来場をお待ちしております。今年の冬はことごとく他寒く、例年の今頃なら満開を迎える筈の梅の花も、まだチラホラと咲き始めたところですが、これからは胸がときめく春に向かって、梅、桃、桜などの花々が次々と咲いてくれると思います。明るい春の到来を信じて、元気を出そうではありませんか。(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集部員：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

音楽の世界3月号(通巻537号)

2012年3月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間:5000円 (6ヶ月:2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

*日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

*乱丁、落丁がございましたらお取替えします